

氏五十度ノ熱灌注法ヲ施コスナ良トス

第一百五十三章 子痲

子痲ハ

子痲ハ 分娩又ハ妊娠若クハ産褥中ニ發スル痲痺症ニシテ甚ダ痲痺ニ似タリ而シテ腎臟病ニヨリ全身ニ水腫ヲ患ヒタル婦人ニ之レヲ發スルコト最モ多シ時トシテハ羊膜水腫ヲ兼ヌルコトアリ此症ハ五百回ノ分娩中凡ソ一回アリト云フ且ツ分娩中ニハ最モ多シトス

痲狀

痲狀 子痲ハ卒然トシテ發スルコト多シ然レトモ亦時トシテ頭痛不快惡心嘔吐等ノ前徵ヲ現ハスコトアリ而シテ發作スルキハ眼直視旋轉シ口圍ニ攣縮ヲ現ハシ以テ上肢軀幹下肢ノ筋肉ニ痲痺ヲ及ボシ項部多クハ強直シ劇シク身體ヲ動搖シ精神ハ多ク昏眊ス此ノ如ク痲痺ノ最モ強キ時期ニ至ルキハ呼吸ハ一時停止シ顔面蒼白トナリ口内ヨリ泡沫及ビ血液ヲ漏出ス其血液ハ頸ノ痲痺性運動ニヨリ舌ノ損傷ヲ致スニヨリテ生スルモノナリ次テ痲痺漸ク緩解シ呼吸回復シ鼾聲ヲ放チ精神ハ暫時ノ後漸次ニ回復ス但シ發作間ノ事項ハ尙モ記憶スルコトナキモノ

豫後

トス而シテ此發作ハ多クハ陣痛時ニ現ハレ一發作ノ時間ハ十乃至六十秒ナリ此ノ如クニシテ數分若クハ一二時ノ後ヲ再ビ發作シ發作ノ間短キトキハ精神全ク醒覺スルコトナク發作全ク止ムト雖トモ尙ホ數日間精神臟腑トナルコトアリ發作ノ回数ハ甚ダ不定ニシテ少ナキトキハ一回多キハ五十回ニ至リ分娩ヲ以テ止ムヲ常トス然レトモ産褥中ニ至リ再發スルコトアリ病勢ハ發作ノ數ニ從テ加ハリ其強劇ナルモノハ既ニ分娩中ニ死亡スレトモ産褥中ニ死スルヲ最モ多シトス
分娩ハ發作ニヨリテ障害セラル、コトナク却テ之レヲ催進ス可シ就中妊娠中ニ發作セルモノト雖モ爲メニ陣痛ヲ喚起シ分娩ヲ催サシムルコトアリ
陣痛ハ概シテ通常ト異ナルコトナシト雖トモ時トシテハ著シク強烈トナリ産出期ハ甚ダ短キモノナリ
豫後 子痲ハ危險ノ合併症ニシテ産婦ノ死亡ハ頗ル多ク小兒ノ死數ハ更ニ多數ナリ而シテ小兒ノ死亡ハ母體ノ呼吸不良ナルカ故ニ窒息ヲ

處置	發作間	發作後	小兒ノ娩出
<p>致スニヨル又母體ノ脈搏細小頻數ナルハ甚ダ危険ナリトス 處置 上肢顔面等ニ水腫ヲ患フルノ妊婦ハ子痲ヲ發スルノ恐アルガ 故ニ産婆ハ此等ノ婦人ヲ見バ速カニ醫師ノ許ニ送ル可シ——既ニ子痲 ヲ發作セルカ若クハ其前徵アルガ如キモノハ直チニ醫師ノ來診ヲ請ハ シコトヲ要ス而シテ</p>	<p>發作間 ハ頭部四肢ヲ他物ニ衝突シ又ハ床上ヨリ墜落セシメサラ ガ爲メニ之レヲ支持ス可シ但シ強力ヲ用キテ其攣縮ヲ抑制センコトヲ 試ム可ラズ而シテ舌ノ損傷ヲ豫防センガ爲メニ木箸又ハ小桿ニ布片ヲ 捲キ之レヲ齒間ニ挿ムヲ良トス</p>	<p>發作後 ハ頭部ニ冷濯法ヲ施コシ飲料ハ寒冷ナルモノヲ與ヘ検査ハ 妄リニ之レヲ行フ可ラズ浮腫ノ甚クシキトキハ大ナル布片ヲ熱水ニ浸 シテ絞搾セルモノヲ取り頸ヨリ膝部ニ至ルマテ之レヲ覆ヒ且ツ温カニ 包被シ以テ發汗セシム可シ</p>	<p>小兒ノ娩出 ニ就テハ頭蓋位ナルトキハ後會陰壓出法ヲ行ヒ骨盤</p>

後産期	嘔吐	脱腸(又ハ内臓脱墜)	直腸脱(脱肛)
<p>端位ニ於テハ二時間以上ヲ經ルモ醫師ノ未ダ致ラサルトキハ挽出法ヲ 施コス可シ但シ子宮口ノ開大セザルモノハ固ヨリ之レヲ行フ可ラズ 後産期 ニ於テハ甚クシキ出血アルニアラザレバ子宮ノ摩擦法ヲ行 フ可ラズ又胎盤ハ三十分時以上排出セザルトキハ之レヲ壓出スルヲ良 トス</p>	<p>(一)嘔吐 産婦ハ屢嘔吐スルコトアレトモ其強劇ナラザルモノハ敢 テ害ナキモノナリ而シテ嘔吐アルトキハ灌腸ヲ試ミ飲食物ハ暫時ノ間 之レヲ禁ス可シ嘔吐ノ稍強キモノハ速カニ醫治ヲ乞フ可シ</p>	<p>(二)脱腸(又ハ内臓脱墜) 臍部鼠蹊部ニ之レヲ生ズ分娩ノ際腹壓 ニヨリ著シク脱出シ遂ニ嵌頓ヲ來スコトアリ嵌頓スレバ復納シ難ク劇 痛嘔吐等ヲ來ス脱腸アル婦人ニシテ分娩スルトキハ腹壓ヲ禁シ脱出孔 ヲ指ニテ緊シク壓閉ス可シ嵌頓ノ恐アルモノハ醫治ヲ要ス</p>	<p>(三)直腸脱(脱肛) アルトキハ産婦ヲ側臥セシメ努責ヲ禁シ二指ニ</p>

第一百五十四章 分娩中諸種ノ合併症

異常分娩及其取扱法 分娩中諸種ノ合併症

呼吸困難

石炭酸油ヲ塗リ徐々ニ之レヲ整復シ後ナ綿花ヲ貼シテ壓抵ス可シ
(四)呼吸困難 ハ心臓病、肺病、甲状腺腫、脊椎ノ屈曲等アルトキニ是レ
ヲ發ス此ノ如キ場合ニ於テハ上體ヲ高クシテ臥セシメ或ハ起坐ヲ命ジ
室内ノ溫度ヲ適當ニシ且ツ空氣ノ流通ヲ佳良ナラシメ其他ハ速カニ醫
治ヲ請フ可シ呼吸困難甚ダシキトキハ爲メニ死ヲ致スモノナリ

第二百五十五章 産婦ノ死亡

産婦死亡ノ原因

産婦死亡ノ原因 ハ急性貧血、子宮破裂、子癇、傳染病、心肺ノ重症疾
患ニシテ稀レニハ子宮靜脈内ヨリ血管中ニ空氣ノ竄入スルコトヨルコト
アリ而シテ空氣ノ竄入ハ側臥ニ分娩スルカ又ハイルリガートル
管中ニ空氣ヲ含有セルトキハ是レヲ發スルコトアルモノナリ
産婦卒カニ死亡スト雖トモ健全ナル胎兒ハ尙ホ凡ソ五分間生存ス可シ
故ニ此ノ如キ場合ニ於テ醫師ノ來ルコトナシ且ツ子宮口開大セルヲ見
ハ直チニ胎兒ヲ挽出センコトヲ勉ム可シ

第七編 異常産褥及ヒ其取扱法

第二百五十六章 誘導論

此篇ニ於テハ分娩ノ後、子宮、外陰部、乳房、下肢等ニ發スル變狀、通利ノ異常
及ビ産褥性熱性病等ヲ説キ次ニ初生兒ノ疾病モ亦此篇中ニ論述ス可シ

第二百五十七章 後陣痛ノ過劇

原因 後産期ニ於テ凝血、卵膜又ハ胎盤片ノ子宮内ニ遺殘スルニ基キ
若クハ經産婦ニシテ分娩容易ク、子宮内腔ノ空虚トナルコト甚ク早キモ
ノニ之レヲ發ス

徵候 十分乃至三十分時ヲ隔テ、後陣痛ヲ發シ其疼痛ハ腹部ヨリ陰

部、大腿ニ波及シ時トシテハ強劇ニシテ睡眠ヲ營ミ得ザルコトアリ此後
陣痛過劇ハ多クハ二三日ニシテ止ムト雖トモ稀レニハ第五日ニ達スル
コトナキニアラズ

處置 小兒ニ哺乳セシムルトキハ疼痛増加スト雖トモ全ク授乳ヲ廢

セシム可ラズ其甚ダシキモノハ下腹ニ氷囊ヲ置キ第四日ニ至レバ冷水
菴法ニ交換シ三時間ニシテ之レヲ廢止ス可シ又兼テ加密列花ヲ茶劑ト
ナシテ煎出シ之レヲ服用セシムルヲ良トス若シ疼痛甚クシク睡眠ヲ妨
グルカ又ハ熱ヲ發セルモノニ在リテハ速カニ醫治ヲ請ケシム可シ

第二百五十八章 子宮ノ回復不全

子宮回復不全ノ症状

子宮底ハ異常ノ高所ニ止マリ其壁柔軟ニ

シテ弛緩シ惡露ハ其量多クシテ第二週ニ至ルモ尙ホ血液ヲ交ヘ時トシ
テハ純血ヲ下スコトアリ

原因

原因 多産婦ニシテ雙胎早産或ハ重症ノ出血アルモノ殊ニ小兒ニ授
乳セサル場合又ハ必要ノ安静ヲ欠キ過早ニ起床シ或ハ運動ヲナスモノ
其他便秘ノ持續セルモノ及ビ胎盤片ノ遺殘セルモノ等ニ發ス

處置

處置 ハ安静ニ就床セシメ且ツ醫治ヲ求ム可シ

第二百五十九章 子宮ノ位置異常

子宮後屈

(一)子宮後屈 妊娠前已ニ後屈ヲ患ヒタルモノハ分娩後三四週ニ至

褥婦上能ノ症
狀ヲ發スルキ

子宮脱

惡露影シク血
液ヲ混シ久
スルモノノ
混

レハ再發スルヲ常トス又其他ノモノト雖トモ子宮ノ回復不全アルニ當
リ攝生不良ニシテ過早ノ體動ヲナスガ如キ場合ニ於テ此症ヲ發フルコ
トアリ而シテ之レヲ發スルトキハ下腹ノ牽引痛便秘ヲ發シ尿利少量頻
數等ノ症状ヲ呈ス

褥婦上記ノ症状ヲ發スルキハ 雙合検査法ニヨリテ子宮ノ位

置ヲ檢シ且ツ醫治ヲ請フ可シ

(二)子宮脱 ハ早期ニ起床シ體動ヲ營ム等ニヨリテ發スルモノナリ

處置ハ速カニ醫治ニ委スルヲ要ス

第三百六十章 惡露ノ障害

(一)惡露影シク血液ヲ混シ又久シク血液ヲ混スルモノ
最初一二日惡露ニ影シク血液ヲ混スルトキハ子宮ニ摩擦法ヲ施コシ其
收縮ヲ喚起シ且ツ下腹ニ氷囊ヲ貼シ速カニ醫治ヲ請フ可シ——若シ又
惡露中ニ血液ヲ交ヘ二週ノ久シキニ亘ルトキハ褥婦ヲシテ臥床ヲ離レ
シムルコトナク醫師ノ診察ヲ求ムルヲ要ス

惡露ノ過早閉止

(一)惡露ノ過早閉止 惡露速カニ渴止スト雖トモ褥婦ノ快安ヲ感ズルモノハ毫モ害アルモノニアラズ然レトモ若シ惡露ノ漏泄早ク止ミ下腹ニ疼痛ヲ訴ヘ熱ヲ發シ且ツ口渴アルモノハ産褥性熱症ヲ發セルノ疑アルヲ以テ速カニ醫ノ診察ヲ受ケシムルヲ要ス

惡露ノ臭氣アルモノ

(二)惡露ノ臭氣アルモノ 産褥ノ第三四日ニシテ惡露ニ臭氣ヲ發スルモノ稀ナラズ而シテ此際三十七八度以上ノ熱ヲ發セバ速カニ醫師ノ診察ヲ請ヒ其命ニヨリ腔洗滌ヲ施コス可シ而シテ之レニ使用セルイリガートルノ嘴管ハ石礮及ビ刷毛ヲ用ヰテ洗滌シ後十五分間以上二十倍石炭酸水中ニ浸漬消毒スルニアラザレバ之レヲ他ニ使用ス可ラズ若シ或ハ一器ヲ特別ニ之レニ供用セバ最モ佳ナリ又 イルリガートルモ同様ノ消毒法ヲ行ヒ手モ亦規則ニヨリテ消毒セシムルヲ要ス

陰唇大腿ノ糜爛

(四)陰唇大腿ノ糜爛 惡露ノ濕潤ニヨリ陰唇大腿等ニ糜爛ヲ呈スルトキハ石炭酸水ヲ以テ洗滌シ石炭酸油ヲ綿花ニ浸シテ貼用シ若クハ沃度ホルムルヲ撒布ス可シ

第六十一章 外陰部及ヒ會陰部ノ腫脹

時トシテ分娩時ニ於ケル腫若クハ外陰部ノ挫傷ニヨリ會陰及ヒ外陰部ニ腫脹ヲ生シ皮膚緊張シ光澤ヲ呈シ浮腫狀ヲナスコトアリ此ノ如ク水腫樣ヲナセル腫脹ハ久シカラズシテ消散スルモノナリ

處置 一日二回一%微温石炭酸水ヲ以テ陰唇ノ内面ニ灌注法ヲ施コ

シ且ツ其液ヲ浸セル瓦設片ヲ貼用セシム可シ

第六十二章 便通ノ異常

(一)便秘 褥婦ハ分娩後數日ノ間便秘スルヲ常トス然レトモ時トシテハ已ニ分娩前ヨリ糞便腸内ニ停滯シ産褥中ニ至リ甚クシキ秘結ヲ現ハシ腹部膨滿疼痛ヲ發シ且ツ少シク體温上昇シ恰モ産褥熱ノ初期ニ於ケルカ如キ狀況ヲ呈スルコトアリ

處置 第四日ニ至リ便通ナキトキハ灌腸ヲ施コス可シ若シ甚ダシキ便秘アラバ直チニ醫治ヲ請ハサル可ラズ

(二)下痢 産褥中ノ下痢ハ異常ニ屬ス若シ之レヲ現ハスコトアラバ

下痢

處置

便秘

處置

速カニ醫療ヲ仰シ可シ

第三百六十三章 排尿ノ障害

尿閉

(一)尿閉 ハ困難ナル分娩ノ際尿道又ハ膀胱ノ挫傷ヲ致スニヨリ若クハ仰臥位ノ排尿ニ習慣セザルニヨリテ之レヲ現ハス

處置

處置 ハ便器ヲ温暖ナラシメ且ツ下腹ニ温巻法ヲ施コシ排尿ヲ試マシメ若シ尚ホ能ハザルトキハカテーテルヲ用ユ可シ而シテ其更ニ困難ナルモノハ醫治ヲ請フ可シ

不隨意ノ利尿

(二)不隨意ノ利尿 ハ膀胱頸ノ收縮力微弱ナルニヨリ發スルモノニシテ絶エズ少量ノ尿ヲ泄ラスモノナリ之レヲ放置スルモ自然ニ治スルヲ常トス但シ一二回カテーテルヲ使用シ刺戟ヲ與フルトキハ大ニ治シ易キモノトス外陰部ハ屢洗濯シ大ニ清潔ニナラシムルヲ要ス

尿ノ持續性漏泄即チ尿瘻

(三)尿ノ持續性漏泄即チ尿瘻 ハ甚タ緊要ナルモノナリ此症ハ膀胱又ハ尿道ト腔若クハ子宮トノ間ニ瘻孔ヲ生シ是レヨリ絶エズ尿ノ漏泄スル疾患ニシテ膀胱腔瘻ヲ最モ多數ナリトス之レヲ發スルノ原因

處置

ハ狹窄骨盤等ニ於ケル過度ナル壓迫ニ因スル組織ノ壊死ニシテ産褥ノ始メ二三日間ハ尿閉若クハ排尿時ノ緊痛ヲ現ハシ後チ壊死セル組織ノ破壊シテ孔穴ヲ作ルニ及ビ尿ハ絶エズ腔内ニ向テ流出シ自ラ尿道ヨリ排泄スルコト能サルモノナリ尿瘻ヲ生ズレバ尿ノ刺戟ニヨリ陰部ニ糜爛ヲ來シ且ツ甚タシキ臭氣ヲ發ス可シ

膀胱加答兒

處置 醫ノ診察ヲ請ヒ産褥中ハ大ニ外陰部ヲ清潔ナラシムルヲ要ス産褥ヲ經過セハ醫治ニヨリ瘻孔ヲ閉合セシム可キモノトス

處置

(四)膀胱加答兒 ハ通常不潔ノカテーテルヲ使用スルニヨリテ發ス其症狀ハ尿利頻數恥骨縫際上部ノ疼痛排尿時ノ劇痛等ニシテ尿ハ初メ雲片狀物ヲ混シ後チ膿様ニ混濁ス可シ

處置

處置 ハ安靜ニシテ無刺戟性ノ食餌ヲ與ト膀胱部ニ濕布巻法ヲ施コシ他ハ醫治ヲ請フ可シ

靜脈血塞

第三百六十四章 下肢靜脈ノ血塞
靜脈血塞 ハ運動ヲ營マザルニヨリ稀レニ之ヲ發スルモノニシテ

異常産婦及其取扱法

下肢靜脈ノ血塞

三百五十七

主トシテ下肢内側ノ靜脈ニ現ハル症狀ハ疼痛、麻痺、浮腫等トナス而シテ第一週ノ終リニ發シ多クハ數日ニシテ消退ス可シ然レモ稀レニハ其血塞片破解シテ血液中ニ混シ大靜脈ヨリ心臟ヲ經更ニ肺動脈ニ入り其分枝ニ達シ茲ニ閉塞ヲ生ズルコトアリ之レヲ肺動脈ノ血栓ト云フ甚タ恐ル可キ疾患ナリ此血栓ヲ生ズルトキハ患者ハ速カニ呼吸困難トナリ遂ニ死ニ歸スルコトアリ

處置

時トシテ血栓ヲ生スルノ危険アルカ爲メニ極メテ安臥セシメ速カニ醫治ニ托ス可シ

第六十五章 乳房ノ疾患

乳汁過泄

(一)乳汁過泄 乳汁多量ニ分泌シ絶エズ流出スルノ症ヲ云フ

乳汁漏

(二)乳汁漏 ハ授乳ヲ廢セシ後、多量ナル稀薄ノ乳汁久シク分泌スルモノナリ

以上ノ二症ハ共ニ其婦人ナシテ甚ダ衰弱ニ陥ラシム可シ即チ患婦ハ慢性貧血ヲ致シ顔貌蒼白、身體羸瘦、劇甚ノ腰痛、食思缺損、足脚振顫、視力衰弱

乳頭ノ損傷

等ヲ現ハス處置ハ小兒ニ授乳スルコトナク乳房ニ繃帶ヲ施コシ滋養物ヲ與ヘ便通ヲ佳良ナラシメ他ハ醫治ヲ求ム可シ

(三)乳頭ノ損傷

乳頭ニ輕度ノ損傷又ハ皮膚ノ薄弱ナル所アレハ小兒ノ吸啜ニヨリテ始メハ水泡ヲ作り次ニ水泡ノ破開ニヨリテ糜爛面トナリ茲ニ微菌ノ繁殖スルニ至レバ潰瘍ヲ生シ甚ダシキハ深部ニ蔓延シテ乳線炎ヲ誘起ス

原因及ビ症狀

原因及ビ症狀 此症ハ都會若クハ上流ノ婦人ニ發スルコト多ク殊ニ初産婦ヲ著シトス田舎婦人ノ如キハ組織ノ衣服ヲ用井乳頭ヲシテ其摩擦ニ慣レシメ皮膚ヲ強固ナラシムルガ故ニ損傷ヲ發スルコト少ナシ而シテ之レヲ發スルトキハ多クハ龜裂ヲナシ授乳ノ際劇シキ疼痛ヲ感シ時トシテハ出血シ小兒ハ之レヲ吸取シ血樣液ヲ吐出シ若クハ黑褐色ノ便ヲ出スコトアリ

處置

處置 ハ豫防法トシテ先ツ第二篇妊婦ノ攝生法及ヒ第四篇褥婦看護法中第四十二章及ヒ第九十三章ニ記セル處置ヲ施コスヲ要ス殊ニ哺乳

ノ時間ヲ定メ安リニ屢授乳ス可ラズ而シテ少シク乳頭ニ灼痛ヲ發スル

ニ至ラバ授乳後冷水ヲ以テ洗滌シ硼酸軟骨若

クハ阿列布油ヲ塗布シ授乳ノ前ニ至リ之ヲ洗

ヒ去ル可シ——水ヲ以テ捲法ヲ施コスハ不可

ナリ却テ表皮ヲ柔軟ナラシムルノ害アリ又既

ニ損傷ヲ發スト雖トモ可及的授乳ヲ廢スルコ

トナク醫治ヲ乞ヒ耐忍シテ哺乳セシムルヲ良

トス或ハ乳頭帽子ヲ試用ス可シ然レトモ此器

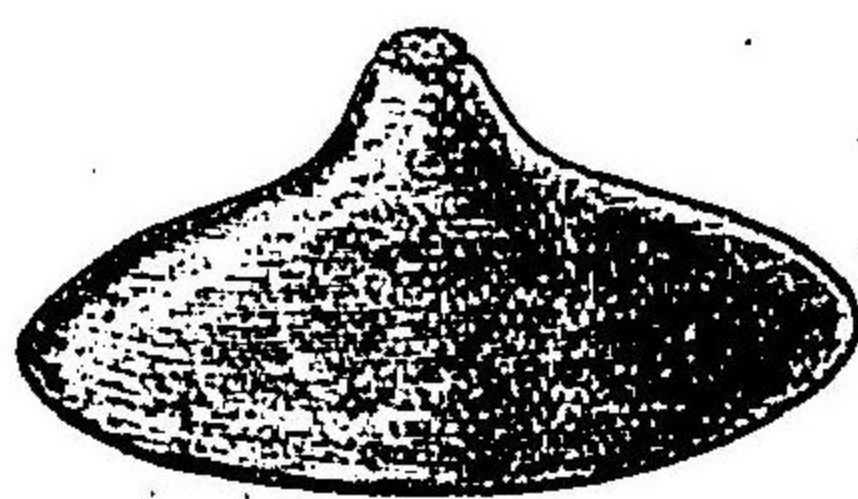
ヲ用ユルトキハ小兒之レヲ吸啜スルヨト難ク甚ダシキ耐忍ヲ要シ若ク

ハ全ク小兒ヲシテ慣レシムルコト能ハザルコトアリ若シ又到底治癒セ

サルカ或ハ其損傷ニヨリ乳腺炎ヲ誘起セントスルニ至ラハ速カニ授乳

ヲ廢セザル可ラズ

第百一十圖 乳頭帽子ノ圖



テ其微菌ハ小兒ノ口ヨリ傳へ或ハ妊婦自身若クハ産婆ノ手ヲ經テ惡露ヨ

リ乳房ニ傳フ可シ而シテ乳房ニ於テハ或ハ乳頭ノ損傷ヨリ腺間ノ結締

織ニ傳ハリ或ハ輸乳管ヲ經テ此ニ達ス可シ而シテ輸乳管ノ閉塞アルト

キハ微菌進入シ且ツ繁殖シ易キニヨリ甚タ乳腺炎ヲ發シ易キモノナリ

症狀 二乃至六週ニシテ之レヲ發シ惡寒發熱シ甚ダシク疼痛ヲ感シ

觸診スルニ硬固ノ疼痛アル結節ヲ觸知ス可シ又腋下ノ水脈腺ニ腫脹ヲ

發シ同側ノ上肢ヲ運動セシメ難キニ至ルコトアリ此ノ如ク腫脹疼痛發

熱ヲ現ハシ二三日ニシテ消退スルコトナケレバ化膿ニ陥リ終ニ破開ス

ルニ至ルモノナリ化膿ニヨリテ多クノ腺胞ヲ荒蕪スルニ至レバ全ク乳

汁ヲ分泌スルコト能ハザルコトアリ

處置 乳腺炎ヲ發スルノ恐アルモノハ第九十三章中(二百二十四頁)ニ

記セル豫防法ヲ行ヒ乳房ヲ清潔ニシ不潔ノ手又ハ物品ヲ觸レシムルコ

トナク乳頭ニ損傷アレバ直チニ適當ノ治法ヲ施コス可シ又既ニ炎症ヲ

發スレバ小兒ニ吸啜セシムルコトナク乳房ヲ繙帶ニテ舉上シ冷捲法ヲ

行ヒ便通ヲ佳良ナラシム可シ間々其化膿ヲ防止シ得ルコトアリ其他ハ

異常産褥及び其取扱法 乳房ノ疾患

三百六十一

速カニ醫治ヲ求ムルヲ要ス

第三百六十六章 產褥性熱性病

產褥性熱性病ノ病理

產褥性熱性病ノ病理 產褥中ノ熱性病ハ分娩後一乃至數日ニシテ發スル疾病ニシテ其輕重甚ク種々アリト雖モ產婆學ニ於テハ之レヲ二種ニ區別スルヲ佳トス一、創傷熱二、產褥熱是レナリ創傷熱ハ子宮頸又ハ外陰部ニ於ケル創傷ニ微菌附着シテ腐敗機即チ化膿ヲ發シ此ヨリ有毒質ヲ血中ニ吸收シテ熱候ヲ現ハスモノナリ產褥熱トハ微菌更ニ深ク組織中ニ浸入シ或ハ子宮實質或ハ扁韌帶或ハ子宮外膜或ハ全腹膜或ハ淋巴管血管等ニ炎症炎症トハ畧シテ之ヲ云ヘバ化膿ノ前期ニシテ尙ホ膿汁ヲ生ズルニ至ラス赤色ニシテ腫脹シ熱候及ビ疼痛ノ四徴ヲ呈スルモノナク云フ若クハ化膿ヲ發シ其毒質大ニ血中ニ混シ危險ノ熱症ヲ現ハスモノナリ但シ醫家ニ於テハ此產褥熱中更ニ種々ニ區別シ本來ノ產褥熱ト他病トニ分ツト雖トモ產婆學ニ於テハ此區別ヲ設ク可キモノニアラズ

原因

原因 ハ固ヨリ毒性アル微菌ニ基クモノニシテ其微菌ハ間々手器械臥具諸種ノ布巾等ノ中ニ存シ此等ノ諸物陰部ノ創傷ニ觸ルノ際微菌ハ茲ニ附着シ漸次ニ繁殖シ遂ニ各種ノ病變ヲ生ズ又微菌ハ上記ノ諸物ニ附着シテ産道内ニ達スルノ外多クハ豫シメ産道内ニ存スルカ故ニ創傷ノ生ズルニ及ヒ盛ニ其部ニ繁殖ヲ營ミ以テ同シク熱症ヲ發スルコトアリ此ノ如ク微菌ヲ他物ヨリ傳フルヲ單ニ傳染ト云ヒ豫シメ自體中ニ存セル微菌ニヨルモノチ自己傳染ト稱ス消毒法若クハ防腐法ハ此二種ノ傳染ヲ防止スル最要ノ方法ナリトス尙ホ第二篇第三十七章(九十八頁)ヲ參考ス可シ

次ニ創傷熱及ヒ產褥熱ノ微候處置等ヲ記述ス可シ

第三百六十七章 創傷熱

創傷熱トハ

創傷熱トハ 分娩後二三日ニシテ現ハレ同時ニ乳汁ノ分泌ヲ現ハスカ故ニ昔時ハ誤テ專ラ之レヲ乳熱ト名ケタリ尙ホ第四篇第九十二章(二百十五頁)ヲ參考ス可シ

原因	徵候
原因	ハ第六十六章ニ記述セリ
徵候	產褥ノ第二日若クハ第三日ニシテ發シ時トシテハ輕度ノ惡寒ヲ伴フテ發熱シ而シテ其熱度多クハ低クシト雖トモ稀レニ三十九度以上ニ達シ脈搏ハ通例百以下トナス腹部柔軟ニシテ子宮及ビ扁韌帶ノ部位(子宮ノ兩側ニ疼痛ヲ呈セズ)外陰部ヲ檢スルニ其損傷ハ間々黃色ノ被覆物ヲ被フリ惡露モ亦屢臭氣ヲ呈スルコトアリ褥婦ノ全身狀態ハ通例佳良ニシテ食餌減ズルコトナク唯渴ヲ訴フルノミ——此症ハ多クハ二三日ニシテ消散ス可シ
處置	此症ハ危險ナキヲ常トスレトモ尙ホ產婆ハ必ズ醫師ノ診察ヲ求ムルヲ要ス何トナレバ重症ナル產褥熱モ此ノ如キ徵候ヲ以テ發スルコトアルニヨル而シテ醫師ノ命ニヨリ腔内外陰部ノ洗滌ヲ行ヒ之レヲ終レルノ後ハ其手及器具ハ嚴ニ消毒法ヲ施コス可シ
原因	ハ既ニ第六十六章ニ論說セリ
徵候	多クハ產褥ノ第一日ニ於テ惡寒戰慄ヲ伴ヒ若クハ之レヲ伴ハズシテ發熱シ頭痛口渴食欲減損ヲ呈ス(若シ初メニ體温高カラズシテ脈搏甚ダ頻數ナルモノハ最モ危險ノ徵ナリ)次テ子宮部若クハ廣韌帶ノ部位ヲ壓スレバ疼痛ヲ現ハシ瓦斯腸内ニ滯積シテ腹部鼓張シ嘔吐ヲ發シ遂ニ胆汁ヲ吐出スルニ至ル惡露ハ減少シ乳汁ノ分泌尿量モ亦少ナク重症ナルハ第一週ノ終リ若クハ第二週ノ始メニ於テ心臟麻痺ヲ以テ死ニ陥ル——屢惡寒戰慄ヲ發スルモノハ則チ之レヲ發スル毎ニ他ノ臟器(心臟肺臟腦等)ニ炎症ヲ續發スルノ徵候ナリ——以上ノ他會陰ノ裂傷ヨリ丹毒ヲ發スルコトアリ
處置	產褥熱ヲ發スルノ徵アルヲ見ハ速カニ醫治ヲ求ム可シ而シテ腹痛アルトキハ下腹ニ氷囊ヲ貼ス可シ便秘アリト雖トモ醫師ノ到ラサル前ハ下劑若クハ灌腸ヲ用ユ可ラズ——其ノ後チ產婆ノ產褥熱患者ヲ處置ス可キヤ否ヤハ醫師ノ命令ニ從フ可キモノトス
產婆、產褥熱患者ヲ處置スルノ際若シ看護婦アルトキハ之レニ腔其他ノ	

原因	徵候
原因	ハ第六十六章ニ記述セリ
徵候	多クハ產褥ノ第一日ニ於テ惡寒戰慄ヲ伴ヒ若クハ之レヲ伴ハズシテ發熱シ頭痛口渴食欲減損ヲ呈ス(若シ初メニ體温高カラズシテ脈搏甚ダ頻數ナルモノハ最モ危險ノ徵ナリ)次テ子宮部若クハ廣韌帶ノ部位ヲ壓スレバ疼痛ヲ現ハシ瓦斯腸内ニ滯積シテ腹部鼓張シ嘔吐ヲ發シ遂ニ胆汁ヲ吐出スルニ至ル惡露ハ減少シ乳汁ノ分泌尿量モ亦少ナク重症ナルハ第一週ノ終リ若クハ第二週ノ始メニ於テ心臟麻痺ヲ以テ死ニ陥ル——屢惡寒戰慄ヲ發スルモノハ則チ之レヲ發スル毎ニ他ノ臟器(心臟肺臟腦等)ニ炎症ヲ續發スルノ徵候ナリ——以上ノ他會陰ノ裂傷ヨリ丹毒ヲ發スルコトアリ
處置	產褥熱ヲ發スルノ徵アルヲ見ハ速カニ醫治ヲ求ム可シ而シテ腹痛アルトキハ下腹ニ氷囊ヲ貼ス可シ便秘アリト雖トモ醫師ノ到ラサル前ハ下劑若クハ灌腸ヲ用ユ可ラズ——其ノ後チ產婆ノ產褥熱患者ヲ處置ス可キヤ否ヤハ醫師ノ命令ニ從フ可キモノトス
產婆、產褥熱患者ヲ處置スルノ際若シ看護婦アルトキハ之レニ腔其他ノ	

洗滌ヲ行ハシムルヲ佳トス自己ノ手ヲ不潔ナラシメサルノ益アリ若シ
又自ラ洗滌ヲ施コスノ場合ニ於テハ洗滌後ノ手ノ消毒ハ單ニ温湯石礮
ヲ以テ洗滌スルノミナルハ不可ナリ必ラズ一タビ全身浴ヲ行ヒ而シテ
後チ二三分間五%石炭酸水ヲ以テ消毒スルヲ要ス消毒石後炭酸水ヲ洗
ヒ去ルヲ可トス此ノ如クナラサレバ決シテ他ノ妊婦産婦若クハ産褥婦
ノ検査ヲ施コス可ラズ

第一百六十九章 初生兒ノ疾患

初生兒ノ疾患

初生兒ノ疾患ハ 分娩時ノ障害ニヨルモノアリ先天性ニ出ツル
モノアリ看護ノ不良ナルニ基ツクモノアリ或ハ傳染病毒ノ感染ニヨリ
テ發スルモノアリ而シテ皆ナ娩出後二三週間内ニ發現シ産婆ノ注意ヲ
怠ル可ラザルモノナリ此諸種ノ疾患ハ之レチ以下ノ各章ニ説述ス可シ

第一百七十章 初生兒ノ假死

假死トハ

假死トハ 小兒産出スト雖トモ呼吸ヲ發セズ且ツ自ラ肢體ヲ運動
スルコトナシ僅カニ幽微ナル心音ヲ聽取ス可キモノナ云フ

原因

胎兒假死ニ陷
ワントスルノ
徴候

假死セル初生
兒ノ徴候

原因 小兒母體中ニ在リテ酸素ヲ攝取シ炭酸ヲ排泄スルノ作用障害
セラレバニヨルコト最多シ即チ産出期ノ延長臍帶壓迫胎盤ノ早期剝
離是レナリ其他頭蓋ノ壓迫ヲ受クルカ若クハ失血ヲ致スコヨリテ發ス
胎兒假死ニ陷ラントスルノ徴候 心臓音ハ陣痛休歇間ト雖ト
モ甚ダシク緩慢トナリ後チ終ニ疾數トナル又胎兒ハ胎尿ヲ漏ラシ羊水
チ黒色ニ混濁セシム但シ骨盤端位ニ在リテハ胎尿ヲ出ダスモ假死ノ徴
ニアラズ又既ニ母體中ニ在リテハ呼吸運動ヲ營ムガ故ニ其口鼻ノ壓閉
セラレザルモノハ血液又ハ胎尿ヲ氣道内ニ吸入ス可シ此呼吸運動ハ骨
盤端位分娩挽出術ヲ施コスノ際之レヲ認メ得ルコトアリ若シ臍帶脫ア
ルトキハ陣痛休歇時ト雖モ胎兒假死セルノ際ニハ其搏動ノ消失スルヲ
觸知ス可シ

假死セル初生兒ノ徴候 假死ノ輕度ナルモノハ顔面青赤色ヲ呈
シテ屢起シ臍帶ハ甚ダシク緊張シ時トシテハ尙ホ僅カニ搏動ヲ呈シ四
肢ハ全ク弛緩スルニ至ラズ——重症ナルモノニ在リテハ顔面蒼白色ニ

處置

稍重症ナルモ

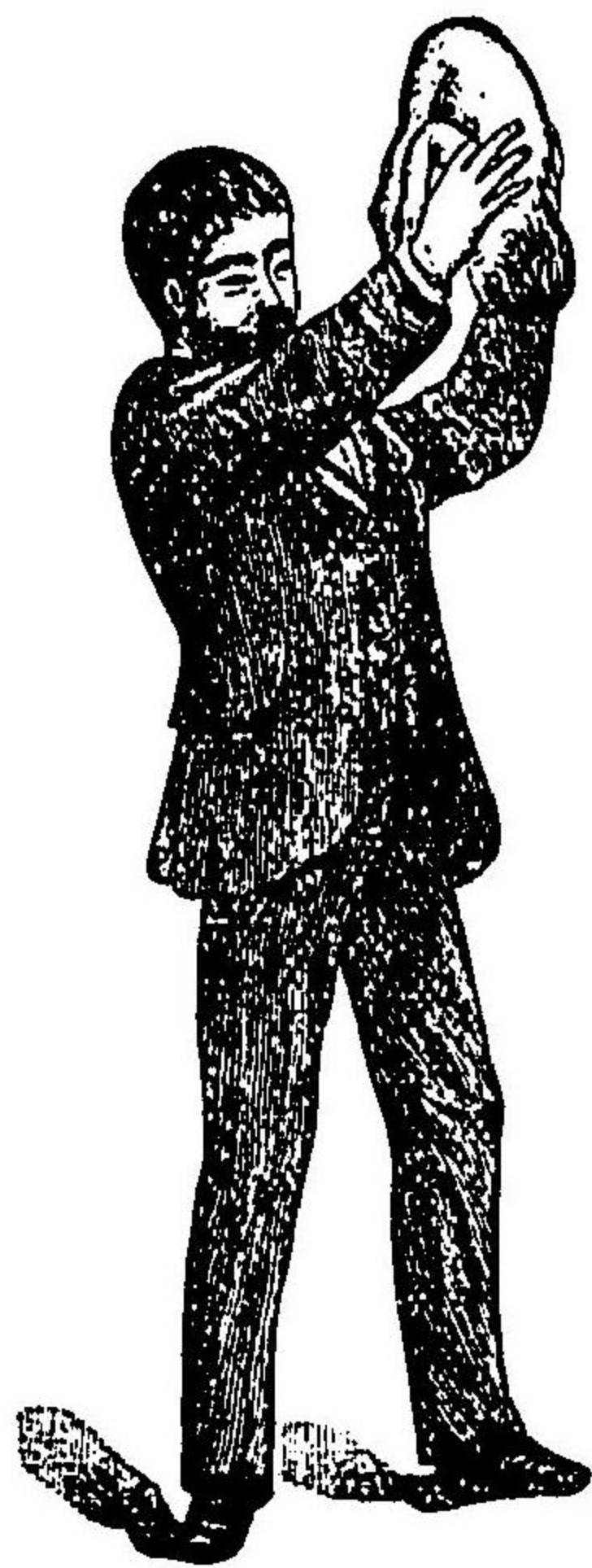
シテ瘦削シ四肢ハ柔軟ニシテ弛緩シ全身ノ皮膚モ亦蒼白トナリ口及ヒ
 肛門ハ哆開シ臍帶ハ萎縮ス可シ
 處置 假死ノ輕度ナルモノニ在リテハ小指ニ布片ヲ捲キ若クハ之レ
 ナ捲クコトナシテ直チニ兒ノ口内ニ挿入シ咽喉及ビ口腔内ニ存セル
 粘液ヲ除去シ數回輕ク臀部ヲ撲ツテ以テ足ルコトアリ而シテ尙ホ呼吸
 ナ發セザルモノハ羽毛ノ類ヲ以テ鼻及ビ咽喉ヲ刺戟ス可シ
 稍重症ナルモノニシテ此ノ如クスルモ蘇生セサルモノハ直チ
 ニ臍帶ヲ切離シ且ツ咽喉内ニ粘液ノ存在スルコトアルガ故ニ彈性
 カテールヲ以テ之レヲ吸出シ而シテ後チ小兒ヲ三十五度乃至三十
 七度ノ温湯中ニ入レ布片ヲ以テ胸部背部及ビ四肢ヲ強ク摩擦シ且ツ其
 胸腹部ニ冷水ヲ灌グ可シ此ノ如クニシテ尙ホ温湯中ニ置キ少時間之レ
 チ安靜ナラシメ以テ呼吸ヲ發スルヤ否ヤヲ檢センコトヲ要ス——若シ
 尙ホ呼吸ヲ發セザルトキハ小兒ヲ床上ニ仰臥セシメ一手掌ヲ背下ニ送
 入シ他手ヲ胸上ニ置キ兩手ヲ以テ一タビ胸部ヲ壓縮シ次ニ之レヲ弛メ

圖二十百第 圖ノ(甲)法吸呼工人



最初兒體ヲ把握シテ
 懸垂スルヲ示ス但シ
 次圖ノ如ク鼻上スル
 ノ後チ再ヒ振下シテ
 本圖ノ如クナラシメ
 反復シテ之レヲ行フ
 モノナリ

圖三十百第 圖ノ(乙)法吸呼工人



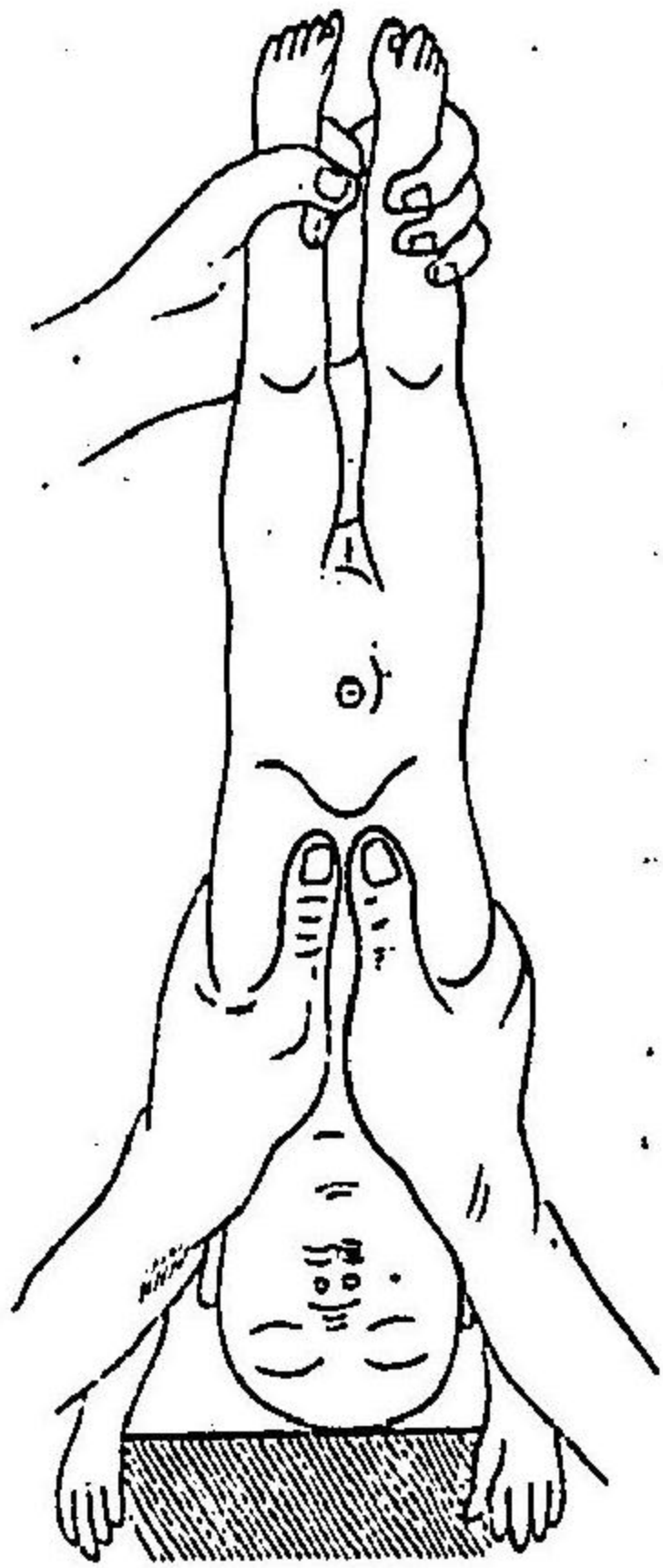
〔以上二圖ノ人工呼吸
 法ヲシユルツエ氏ノ
 振搖法ト名ク〕

以テ胸廓ヲ擴張セシメ數回反復シテ之レヲ行ヒ人工的ニ呼吸ヲ營マシム。而シテ尙ホ呼吸ヲ發セザルトキハ產婆ハ兩脚ヲ開キテ立テ兒體ヲ前方ニ向ケテ兩手ニ兒ノ兩肩ヲ握リ之レヲ懸垂シ(第百十二圖)次テ一タヒ之レヲ高ク舉上シテ自己ノ頭部ノ高サニ達シ小兒ヲ倒マナラシメ(第百十三圖)而シテ後ヲ之レヲ下方ニ振下シ自己ノ足部ニ致シ兒體ヲ再ヒ懸垂スルニ至ル以上ノ法ヲ行フコト凡ソ十回ナルトキハ小兒ヲ温浴中ニ入レ而シテ尙ホ不十分ナルヲ見ハ再ビ此法ヲ行フ可シ此ノ如ク兒體ヲ舉上スレバ呼吸ヲナシ次ニ之レヲ下方ニ振下スレバ吸氣ヲ致スモノナリ此法ヲ名ケテ振搖法ト云フ

或ハ若シ其臍帶青色ニシテ腫起シ血液充盈セルモノハ切離セルノ際小兒ノ臍帶端ヨリ一二食匙十五乃至三十瓦ノ血液ヲ漏出セシメ然ル後ヲ結紮スルヲ良トス

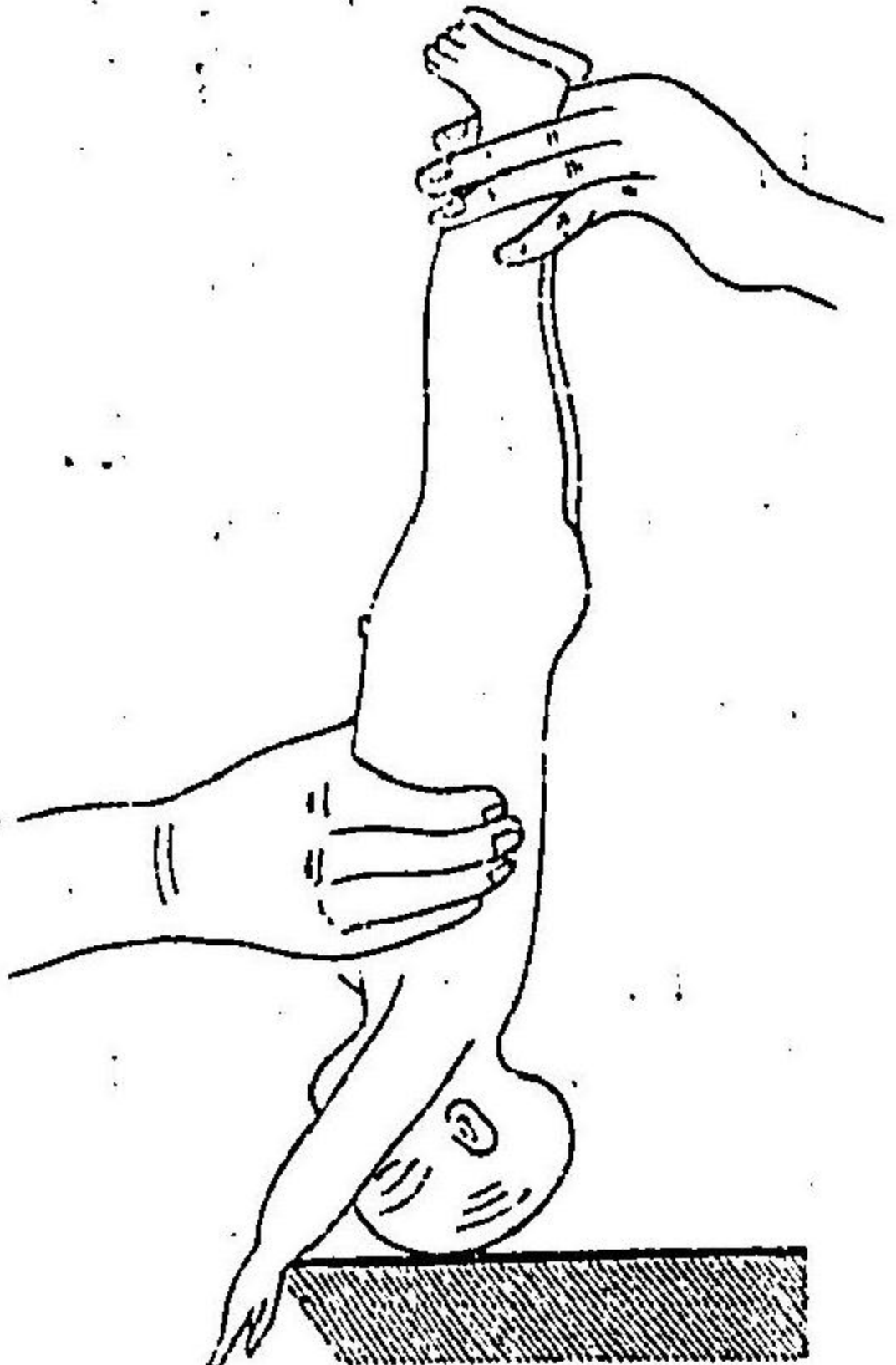
前項述ブル所ノ振搖法ハ從來普ク行ハレシモノナレドモ更ニ簡便ナル人工呼吸法アリ此法ハ第百十四圖及ヒ第百十五圖ニ示スガ如ク兒足ヲ

第百四十圖 兒體ヲ倒懸スル人工呼吸法ノ圖



兩手ヲ以テ胸部ヲ把握スルモノヲ示ス

第百五十圖 前圖ニ同シ



一手ヲ以テ胸部ヲ把握スルヲ示ス
「此チアプロビョーニツク氏ノ人工呼吸法ト名ク」

執リテ倒マニ懸垂シ一手又ハ兩手兩手ナルトキハ他人ヲ以テ兒足ヲ執
 ラシムルヲ要スナリ以テ兒ノ胸部ヲ握リ一タビ壓縮シ一タビ之レヲ緩メ
 反復シ以テ呼吸運動ヲ營マシムルモノトス之レヲ行フノ間小兒ヲ屢温
 湯中ニ浴セシム可シ此法ハ甚ダ便利ニシテ時トシテハ臍帶ヲ切離セズ
 ト雖トモ尙之レヲ行フコトヲ得可シ氣道内ノ異物ハ自ラ流下シテ口外
 ニ出テ且ツ腦内ニ多量ノ血液ヲ送り大ニ回生シ易カラシムルノ益アリ
 加之前述ノ振搖法ニ比スレバ俗人ヲシテ心ヲ傷マシムルコト少ナシ著
 者ハ毎常此法ヲ用ニ大ニ良効アルヲ覺ユ若シ或ハ重症ノ假死ニシテ之
 ナ施コスモ効ナキトキハ振搖法ヲ試ム可シ

小兒回生ノ假候

小兒回生ノ假候 小兒回生スルトキハ蒼白若クハ青赤ナル顔色消
 退シ四肢漸次ニ緊張ヲ生シ口邊ニ弱キ搐動ヲ現ハシ眼ヲ開キ四肢ヲ動
 搖シ初メハ不正ノ呼吸ヲ發シ遂ニ啼泣スルニ至ルモノナリ——以上回
 生ノ徵ヲ現ハサバ温浴ニ入ラシメ回生スルヲ微弱ナルキハ注意シテ尙
 ホ人工呼吸法ヲ反復シ高聲ヲ發シテ泣キ活潑ニ呼吸スルニ至ル可シ

回生ノ困難ナル場合

回生ノ困難ナル場合 以上記セル所ノ法ニヨリ稍久シク人工呼
 吸法ヲ施コスニ當リ効ナシト雖モ速カニ之ヲ廢棄スルコトナク善ク喉
 内ノ粘液ヲ去リ少シク休憩シテ温浴及ビ人工呼吸法ヲ施用ス可シ而シ
 若シ効ナキキハ心動ノ全ク静止スルヲ確メ始メテ之レヲ止ム可シ但シ
 尙ホ温暖ニ包被シ之レヲ安置スルヲ法トス極メテ稀レニハ人工呼吸法
 ナ施コシテ効ナシトナセル小兒ノ回生スルコトアリ——總テ假死ノ困
 難ナル場合ニ於テハ速カニ醫治ヲ求ムルヲ要ス

第一百七十一章 分娩時ニ生ゼル兒頭ノ變化

産瘤

(一)産瘤 ハ分娩ノ際、頭面部、頸部等ノ一部子宮口内ニ括約セラル、
 コヨリテ生シ頗ル腫脹シ時トシテハ甚ダシク青赤色ヲ呈ス此變狀ハ組
 織中ニ血漿浸潤シ且ツ鬱血ヲナスニ基ツクモノナリ此産瘤ハ通例一二
 日ニシテ消散スルヲ常トスレトモ時トシテハ數日ヲ經テ消失セズ或ハ
 却テ増大スルコトアリ此ノ如キハ速カニ醫治ニ托スルヲ要ス

頭蓋血腫

(二)頭蓋血腫 分娩時ノ壓迫ニヨリ頭蓋骨ノ骨膜下ニ血液ヲ溢出セ

異常産時及其取扱法

分娩時ニ生ゼル兒頭ノ變化

頭部ノ變形

ルガ爲メニ生ズルモノニシテ顛頂骨若クハ後頭骨上ニ生シ縫合又ハ顛門ヲ越エテ他骨ニ蔓延スルコトナシ其色ハ通常ノ皮膚ト異ナルコトナシ波動ヲ呈ス丁寧ニ之レヲ被覆シ保護スルトキハ數日ニシテ吸收セラレ消失ニ歸ス可シ但シ其症ノ輕重ヲ區別シ易カラザルヲ以テ初ヨリ醫ノ診察ヲ求ムルヲ要ス

(三)頭部ノ變形 第三編第五十八章第四百三十三頁ニ記セルガ如ク後頭位ニ於テハ兒頭後方ニ延張シ前顛頂位ニ在リテハ兒頭ノ前後徑短縮シ顔面位ナルキハ其顔横ニ壓縮セラレ醜形ヲ現ハシ其他ノ難産ニ在リテハ種々ノ不正形ヲ呈ス而シテ甚タシキモノニ至リテハ頭蓋骨ノ骨傷ヲ生ズルコトアリ此等ノ變形ニシテ骨傷ヲ兼ザルモノハ敢テ治法ヲ要セズ二三日ニシテ正規ニ復スルモノトス

第三百七十一章 臍部ノ疾患

糜爛

(一)糜爛 臍帶ノ斷端脫落後臍窩ニ糜爛ヲ殘スコトアリ此ノ如キトキハ毎回石炭酸水ニテ洗ヒ硼酸末又ハ沃度ホルムヲ撒布シ瓦設若ク

ハ脫脂綿ヲ貼シ綳帶ヲ施コス可シ速カニ治セザルモノハ醫治ニ委スルヲ要ス

(二)炎症 以上ノ糜爛部赤色ニシテ腫脹スルトキハ即チ炎症ヲ發セ

ルモノナリ此ノ如キトキハ同シク前項ノ法ニヨリテ處置ス可シ而シテ速カニ治シ難キトキハ醫治ヲ求ム可シ

(三)臍出血 若シ出血ヲ呈スルコトアラバ石炭酸水ヲ蘸セル小綿球ヲ以テ強ク壓抵シ綳帶スルヲ要ス出血ノ強度ナルモノハ速カニ醫治ヲ乞フ可シ

(四)臍脫腸 生來臍輪ノ廣キカ若クハ初生兒劇シク啼泣シ又ハ甚ダ努力スルトキハ腸管臍輪ヨリ脫出シ其皮膚囊狀ニ膨出セラレ、コトアリ

處置 ハ豫防法トシテ便通ヲ佳良ナラシメ若シ既ニ脫腸ヲ發スルノ徵アラハ啼泣セシムルコトナカラシメ丁寧ニ臍綳帶ヲ施コシ而シテ醫ノ診察ヲ請フ可シ

第七十三章 骨傷

骨傷 ハ頭蓋骨上膊骨大腿骨等ニ生ズ就中上膊ノ骨傷ハ困難ナル骨盤端位挽出術ヲ施コストキハ屢之レテ現ハスモノナリ凡ソ上膊又ハ大腿ニ骨傷ヲ生ズルトキハ其肢異常ノ位置又ハ屈曲ヲ現ハシ傷部ヲ壓スルトキハ啼泣ニヨリテ疼痛ノ狀ヲ訴ヘ又其肢ヲ運動セシルトキハ傷部ニ摩擦音ヲ發ス

處置 困難ナル挽出術ヲ施コシタル後ハ必ス四肢ヲ檢シ骨傷ノ有無ヲ確カメ若シ之レアラバ醫治ヲ求メ綑帶ヲ施コサンコトヲ要ス多クハ二三週間ニシテ治癒スルモノナリ

第七十四章 初生兒眼炎

此眼炎ハ第四篇第九十四章(二百二十八頁)ニ記スルカ如ク分娩ノ際腔内ヨリ淋毒性分泌物ノ傳染ヲ受ケテ發シ若クハ産褥中ニ母又ハ産婆ノ手ヨリ之レヲ傳フルニヨル此症ハ甚ダ危険ナルモノニシテ之レニヨリテ盲者トナルモノ多ク之レアリ

症狀

症狀 大抵分娩後第二日ニシテ一眼若クハ兩眼ノ眼瞼縁赤色ヲ呈シテ互ニ粘着シ以テ眼裂ヨリ帶綠色ノ水樣液ヲ出タシ其液漸ク膿狀トナリ眼瞼ハ甚ダシク腫脹シ眼ヲ開クコト能ハサルニ至ルモノトス始メ一眼ニ發スルモノハ遂ニ他ノ眼ニ傳ヘ又ハ他人ノ眼ニ傳染シ得可シ此眼炎ノ重症ナルトキハ多クハ失明シ或ハ失明セサルモ白翳ヲ遺スモノナリ

處置

處置 産婦若シ其陰部ヨリ膿樣ノ分泌物ヲ漏シ淋疾ノ疑ヒアラバ分娩中ニ微温石炭酸水ヲ用キテ腔内ヲ洗滌シ(第三篇第五十九章)小兒ハ分娩後直チニ醫治ヲ請ヒ二%硝酸銀水ノ點眼ヲ施コシ以テ危険ナル眼炎ヲ豫防ス可シ又既ニ眼炎ヲ發セルモノハ氷片ヲ小布片ニ包ミテ捲法ヲ施コシ且ツ速カニ眼科醫ノ治療ヲ請ケシムルヲ要ス而シテ藥液ヲ以テ眼炎ノ分泌物ヲ拭去スルニハ一手ノ拇指ヲ横ニ眉ノ下ニ抵テ上眼瞼ヲ舉上シ藥液ヲ浸セル綿花又ハ瓦設ヲ以テ流出セル膿液ヲ外眥ヨリ内眥ニ向テ拂拭シ

次ニ示指ヲ以テ下眼瞼ヲ牽下シ同ヨク拭去スルヲ要ス此ノ如クニシテ後キ其手ヲ消毒シ以テ他ニ傳染スルヲ防グ可シ又患眼ヲ拭ヒタル布片綿花等ハ決シテ之レヲ他眼ニ使用ス可ラズ
其他眼病アル小兒ハ其顔ヲ日光又ハ灯火等ニ直射セシムルコトナク暗キ側方ニ向ハシムルヲ要ス——凡ソ小兒ハ眼疾ナキモ劇シキ光線ニ向ハシム可ラズ

第三百七十五章 乳房ノ腫脹及ビ其炎症

初生兒ノ乳房 ハ間々腫脹スルコトアリ時トシテハ其腫脹増劇シ赤色ヲ呈シ疼痛ヲ現ハシ稀レニハ化膿ニ陥ルコトモ亦之レアリ而シテ此ノ如ク化膿スルモ男兒ナレバ敢テ著シキ障害ナシト雖トモ女兒ナルトキハ後來泌乳ヲ廢スルニ至ルコトアルカ故ニ大ニ注意セサル可ラズ
處置 單ニ腫脹ヲ呈スルモノハ務メテ刺戟ヲ避ケ綿花ヲ貼シ輕ク細帶ヲ施コス可シ安リニ之レヲ壓搾シ試ムルガ如キコトヲナストキハ爲メニ化膿ヲ發セシムルニ至ルモ又既ニ化膿ヲ致セルモノハ速カニ醫治

ヲ求ムルヲ要ス

第三百七十六章 鼠蹊脱腸及ビ陰囊水腫

脱腸 (一)脱腸 初生兒ハ先天性ニ鼠蹊部ニ於ケル腹壁ノ間隙ヨリ腸管脱出シ男兒ハ陰囊内ニ女兒ハ大陰唇内ニ脱腸ヲ現スコトアリ此等ノ脱腸ハ小兒啼泣スレバ著シク増大シ安靜ノ際壓迫ヲ施コストキハ雷鳴ヲ發シ腸管ハ腹腔内ニ退却ス可シ腸管若シ嵌頓スルキハ劇痛吐糞病等ヲ發シ甚タシキハ腸管終ニ壊死ニ陥リ生命ヲ失フニ至ルモノナリ
(二)陰囊水腫 男兒ニ在リテハ陰囊水腫ナルモノアリ外觀ハ脱腸ニ類スト雖モ多クハ壓迫ニヨリテ腹腔内ニ入ルコトナク内容ハ腸管ニアラスシテ水様液ナルヲ異ナリトス
(一)及ビ(二)ノ處置 ハ醫ノ診察ヲ請ヒ脱腸ニハ脱腸帶ヲ施コス可シ

第三百七十七章 畸形

初生兒ノ畸形 ニハ種々アリ既ニ第六篇第三百三十二章ニ説述セリ就テ看ル可シ

驚口瘡

第七十八章 驚口瘡

驚口瘡 トハ口内舌上、口唇等ニ小ナル白斑ヲ生ズルモノニシテ時
トシテハ普ク口内ニ蔓延シ余地ヲ存セザルニ至ルコトアリ病原ハ一種ノ
微菌附着シ繁殖スルニヨルモノトス而シテ小兒ハ疼痛ヲ感シ甚タシキ
ハ哺乳スルコト能ハザルモノナリ

處置

處置 此病患ハ不潔ノ乳房又ハ授乳器ヲ以テ哺乳セシメ小兒ノ口内
ヲ不潔ナラシムルニヨリ發スルモノナルカ故ニ下等社會ノ小兒ニ多ク
屢生命ヲ危クスルモノナリ之レヲ豫防スルニハ乳房ナレバ授乳ノ前後
ニ清水ヲ以テ蘸セル布巾ニテ之レヲ清拭シ授乳器ナルトキハ使用後毎
回ゴム管内ニ清水ヲ通シテ洗滌シ更ニ之レヲ水中ニ浸漬シ蓋フ可
シ又小兒ノ口内ハ時々清水ニ蘸セル瓦設ヲ以テ拭淨スルヲ要ス即チ脱
脂セル瓦設ノ一片ヲ取り之レヲ小指ニ捲キ清水ヲ蘸シ口内ニ送入シ口
腔粘膜舌及ビ唇ノ内面ヲ丁寧ニ拭去ス可シ此ノ際爪ヲ以テ其粘膜ヲ傷
ク可ラズ又之レヲ拭去スルニハ哺乳後少シク時ヲ經ルヲ良トス然ラサ

レバ嘔吐ヲ發スルモノナリ或ハ飴其他ノ物品ヲ布片ニ包ミ之レヲ口内
ニ含マシメ小兒ヲ啼泣セシメザラントスルガ如キハ甚ダ不可ナリ是レ
小兒ノ口内ヲ不潔ニナラシメ發病ヲ促カスニヨル又驚口瘡アル小兒ニ
授乳セルモノハ傳染ヲ發スルカ故ニ他ノ小兒ニ哺乳セシム可ラズ既ニ
本症ヲ發スレバ醫治ヲ請フ可シ

第七十九章 消化ノ障害

嘔吐

(一)嘔吐 ニハ疾病ニヨルモノト否ラサルモノトアリ(第四篇第九十
四章二百三十頁)小兒ノ胃ハ彎屈少ナク且ツ比較的ニ小ナルカ故ニ多量
ノ乳汁ヲ取ルトキハ容易ク嘔吐スルモノナリ而シテ嘔吐スルモ必ズシ
モ害アルモノニアラズ只其煩ヲハシキガ爲メニ一時ニ過多ノ乳汁ヲ與
ヘサルヲ良トス若シ著シク嘔吐シ且ツ下痢或ハ便秘スルモノハ始メテ
疾病ト看做シ醫治ヲ請フ可シ

下痢

(二)下痢 ハ水様粘液様ニシテ間々綠色ヲナシ白色ナル不消化性ノ
乾酪片ヲ支ヘ時トシテハ酸臭ヲ放テ通常ノ回数(一日三四回)ヨリモ甚ク

便秘

シク多数ナルニ至ルモノナリ
(三)便秘 ハ二十四時間以上便通ナキモノヲ云フ而シテ屢鼓脹ヲ兼
テ腹痛ヲ發シ放屁ヲ洩ラヌモノナリ

腹痛

(四)腹痛 アルトキハ小兒啼泣シテ足ヲ腹部ニ向テ牽縮シ屢腹部ノ
雷鳴ヲ發ス

下痢便秘腹痛
ノ原因

下痢便秘腹痛ノ原因 此三症ハ共ニ感冒又ハ濃厚ナル牛乳不適
當ナル營養物ヲ與フルニヨリテ發ス

下痢便秘腹痛
ノ原因

下痢便秘腹痛ノ原因 便秘アルトキハ砂糖水若クハ加密列浸ノ
灌湯ヲ行フ可シ其量ハ第一週中ニハ一五〇ヲ以テ足レリトス牛乳ヲ以
テ養フモノハ其乳ヲ稀薄ナラシムルヲ要ス母乳ナルトキハ其母ニ屢稀
薄ノ茶又ハ加密列煎等ヲ服用セシメ運動ヲ營マシム可シ便秘若シ治シ
難キカ或ハ腹痛ヲ兼ヌルトキハ醫治ヲ求ム可シ下痢アルトキハ温湯又
ハ温カミツレ浸テ以テ腹部ノ捲法ヲ行ヒ營養物ニ注意シ尙ホ治セサル
モノハ醫治ヲ請フ可シ

吃逆

第百八十章 吃逆

吃逆 ハ横隔膜ノ痙攣ニヨリ發スル者ニシテ小兒ノ身體冷却スルカ
又ハ一頓ニ多量ノ乳汁ヲ取ラシムルキハ之レヲ發ス故ニ吃逆アルキハ
身體ノ冷却セル者ハ之レヲ暖メ且ツ温暖ナル砂糖水一二茶匕ヲ與ヘ若
クハ砂糖ヲ舌上ニ撒布ス可シ又常ニ急劇ニ哺乳セシメザルヲ佳トス

第百八十一章 痙攣

痙攣

(一)痙攣 小兒痙攣ヲ發スレバ眼球旋轉シ顔面ヲ痙縮シ口角ヲ牽掣
シ手ヲ握リ嘔ルガ如キ聲ヲ發シテ啼泣ス可シ此症ハ熱症便秘鼓脹等ニ
ヨリテ發ス

處置

處置 速カニ醫治ヲ求メ其未ダ到ラサルノ間痙攣若シ甚クシキトキ
ハ一握ノ芥子末ヲ加ヘタル温湯中ニ浴セシム可シ

牙關緊急

(二)牙關緊急

トハ下顎ノ筋痙攣シ口ヲ開クコト能ハサルモノニシ
テ毫モ哺乳スルコト能ハズ甚クシキハ四肢モ亦強直スルコトアリ此症
ハ第一週ノ後半期ニ發シ過熱ノ浴湯又ハ臍ノ疾患ニヨリテ發ス而シテ

處置

臍ノ疾患ハ臍ヲ不潔ナラシムルガ爲メニ一種ノ微菌附着シ茲ニ毒質ヲ生シ以テ血中ニ侵入セシメ神経系ヲ害スルニヨリテ此症ヲ發シ漸次ニ増進シ概ネ死ヲ免ルヽコト能ハズ

處置 瘰癧症ニ於ケルガ如ク速カニ醫治ヲ求ムルヲ要ス又豫シメ之レヲ豫防センガ爲メニ初生兒ノ臍部ハ臍帶脱落シ癒合スルニ至ルマテハ嚴ニ防腐法ヲ行ハサル可ラズ

初生兒黃疸

初生兒黃疸 ハ大人ノ黃疸ト異ナリ蓋シ大人ニ於ケルモノハ主トシテ肝臟ノ疾病ニヨリテ發スレトモ初生兒ニ在リテハ否ラズ而シテ初生兒黃疸ヲ發スルノ原因ハ未ダ詳カナラズ從テ或ハ之レヲ疾病ニアラズト云ヒ又ハ之レヲ疾病トナスモノアリ但シ疾病ナリトスルモ極メテ輕症ニシテ速カニ治癒シ之レガ爲メニ小兒ノ生命ヲ危クスルコトナキモノトス

原因

原因 ハ前項ニ述ブルガ如ク未ダ明カナラズト雖トモ虛弱ナルモノ

症狀

ニ發ス健全ノ小兒ハ通例之レヲ生スルヲナシ故ニ未成熟兒梅毒性胎兒臍ノ疾患ヲ有スルモノ及ビ位置不良殊ニ骨盤端位ニシテ分娩困難ナリシモノ並ニ生後看護不完全ニシテ身體ヲ寒冷ナラシメ又ハ食餌ノ不良ナルモノニ之レヲ發ス

處置

症狀 娩出後第二三日ニシテ發シ第六乃至第八日ニシテ消失ス甚ダ稀レニハ第二三週ニシテ發スルコトアリ而シテ全身ノ皮膚眼ノ結膜ニ黃色ヲ現ハシ尿ハ時トシテ着色セサルコトアルモ通例黃色ヲ呈シ糞便ハ通常ノ色ヲ失フコトナシ

處置

處置 他ニ異常ナキモノハ敢テ醫治ヲ求ムルヲ要セズ身體ヲ温暖清潔ナラシメ且ツ屢浴湯ニ入レ食餌ニ注意シ室内ノ空氣ヲ清良ナラシムルヲ要ス

丹毒

丹毒 トハ臍部又ハ陰部等ニ存スル創面ヨリ微菌ノ侵入繁殖シ蔓延スルガ爲メニ發スル疾患ニシテ其部ノ皮膚ハ赤色ニシテ熱ク且ツ硬結

第三百八十三章 丹毒

チ呈シ漸次ニ周圍ニ波及シ時トシテハ非常ニ廣キ部分ニ亘ルコトアリ
此症ヲ發スレバ小兒ハ發熱シテ啼泣シ哺乳セサルニ至リ多クハ死チ免
ルハコト能ハズ

第三百八十四章 糜爛

糜爛

糜爛 ハ皮膚ノ軟カニシテ滋潤シ又ハ擦摩チ蒙ル部即チ陰部臀部腋
下頸部ノ皺襞膝脛足踵等ニ現ハレ兒體チ久シク濕潤ナラシムトキハ之
レチ發ス故ニ小兒チ不潔ナラシムルトキハ甚ク之レチ生シ易キモノナ
リ而シテ糜爛チ發スルトキハ其部先ツ紅色トナリ滋潤シ上皮ハ廣ク剝
脱シ若クハ皮膚ノ皺襞ニ從ヒ裂創チ生ズルニ至ル

處置

處置 上項記スル所ノ諸部赤色ニシテ滋潤セバ温湯ニテ洗ヒ柔軟ニ
シテ乾キタル布片チ以テ善ク其濕潤チ去リ官粉又ハ澱粉チ撒布ス可シ
又既ニ裂創チ現ハサバ小兒チ温湯中ニ浴セシメ創部チ濕ハシテ徐カニ
皺襞チ開キ脱脂綿等チ用キ之レチ洗ヒ官粉又ハ澱粉チ撒布シ其治シ難
キモノハ醫治チ受クルチ要ス

第三百八十五章 糠枇疹

處置

初生兒第一週又ハ第一ヶ月チ經レバ其前頭若クハ顛頂部ノ皮膚ニ於テ
白色ナル小鱗屑片チ生ズルコトアリ之レチ糠枇疹ト名シ脂肪ノ分泌増
多スルニ基ク此ノ如キモノチ生スルハ主トシテ洗滌チ怠タルニヨル
處置 石礮又ハ卵黄ニテ洗井又ハ初メニ オレーフ油チ塗り後石礮
ニテ丁寧ニ洗滌ス可シ

第三百八十六章 汗疹

汗疹

汗疹 小兒チ過度ニ温暖ナラシメ多ク發汗セシムルトキハ胸部顔面
四肢其他ノ部ニ於テ赤色ナル小疹チ多發スルコトアリ之レチ汗疹ト云
フ此疹チ生スルトキハ過度ニ温暖ナラシムルコトナク且ツ屢温浴チ行
ハシム可シ

第三百八十七章 濕疹

濕疹

濕疹 トハ初メ透明ノ液チ含メル小胞ニシテ後チ破開シ之レヨリ多
量ノ粘稠ナル液チ流出セシメ遂ニ帶白黄色若クハ茶褐色ノ痂皮チ生シ

其流出液ノ附着ニヨリ漸ク近接部ニ同一ノ病機ヲ傳播シ顔面若クハ四肢等ニ廣ク蔓延スルコトアリ

處置 速カニ醫治ヲ請フ可シ而シテ傳染性ヲ存スルガ故ニ之レニ觸ルハトキハ消毒法ヲ行フ可シ

第三百八十八章 水胞疹

水胞疹

ニ二種アリ單性水胞疹及ビ梅毒性水胞疹是レナリ

單性水胞疹

(一)單性水胞疹 水様液ヲ含メル畧ホ豌豆大ノ胞ニシテ身體ノ諸部ニ發ス多數ナラサルトキハ敢テ害ナキモ若シ大ニシテ且ツ多數ナルトキハ爲メ小兒ヲ死ニ至ラシムルコトアリ

梅毒性水胞疹

(二)梅毒性水胞疹 單性水胞疹ニ類シ主ニ手掌足趾ニ發シ稀レニ大腿及ビ胸部ニ現ハル此症アル小兒ハ二三日以内ニシテ死スルヲ常トス

處置

此兩種ノ水胞疹ハ速カニ醫治ヲ請ハシム可シ而シテ共ニ傳染性ヲ有スルガ故ニ産婆此小兒ニ觸ルハトキハ善ク其手ヲ消毒ス可シ

第八編 一般看護法ノ大要

第三百八十九章 誘導編

此編ニ於テハ卒倒外傷其他偶然ニ發スル患者ノ處置及ビ石炭酸液調製法、檢温器用法等一般ノ看護ニ切要ナル事項ヲ説明ス可シ就中外傷ノ如キハ原ト産婆學ノ範圍ニアラズト雖トモ産婆若シ其處置法ヲ知了スルトキハ實際上大ニ便益アルヲ以テ茲ニ附記セルモノナリ

第三百九十章 卒倒

卒倒ハ腦ノ貧血(若クハ充血)ニヨリ發スルモノニシテ殊ニ妊婦ニ之レヲ發シ易シトス

原因 多人數ノ集會セル室内ニ止マリ不潔ノ空氣ヲ呼吸スルコト緊

密ナル衣服ヲ着用スルコト身體ノ甚ダシク温熱ヲ感ズルコト及ビ精神ノ感動等ハ卒倒ヲ發セシムルノ原因ヲナスコトアリ又出血ニヨリテ之レヲ致ス

原因

處置

處置 卒倒セルモノハ衣服ヲ解キ頭部ヲ低カラシメ窓戸ヲ開キテ空氣ノ流通ヲ佳良ニシ頭部ニハ氷嚢若シハ冷水ニ蘸セル布片ヲ貼シ又冷水ヲ飲用セシメ身體ヲ摩擦ス可シ出血ニ因スルモノハ急性貧血第六篇第四百四十八章ノ條下ニ記セル方法ニヨリ之レヲ處置ス可シ

第百九十一章 外傷

外傷性出血

外傷ニ就キテハ外傷性出血及ヒ創傷ヲ説述ス可シ
(一)外傷性出血 ニ三種アリ動脈出血靜脈出血及ヒ組織出血是レ

處置

ナリ動脈性出血ハ鮮紅色ヲ呈シ線ヲナシ又ハ湧クガ如クニ迸出シ靜脈性出血ハ暗赤色ニシテ平等ニ流出ス可シ第六篇第三百二十九章三百二十一頁組織出血ハ創面ヨリ汗ノ出ツルガ如ク滲出スルモノヲ云フ
處置 小量ナル出血ヲ止ムルニハ創面上ニ清潔ナル布片又ハ綿花(可及的)石炭酸水ヲ蘸セルヲ良トス以下之レニ同シ)ヲ貼シ手ヲ以テ固ク壓抵スルガ又ハ繃帶ヲ施コス可シ動脈性出血ナルトキハ其部ヲ高舉シ布片又ハ綿花ヲ極メテ堅ク壓抵シ繃帶ヲ施コサザル可ラズ甚ダシキ動脈

止血セル創傷ノ處置

出血ニシテ以上ノ方ニヨルモ止血セザルトキハ其創部ノ中心側(心臟ノ方位)ヲ堅ク縛シ動脈血ノ流入ヲ妨ゲ創部ニハ緊シク繃帶ヲ施コシ而シテ其繃帶ヲ濕ハシ之レヲ緊密ナラシムルヲ良トス
又靜脈出血ニ在リテハ其體ノ中心側(心臟ノ方位)ニ布帶ノ纏絡セルモノアルトキハ之レヲ解キ血液ノ歸流ヲ便ナラシメ出血部ニ綿花又ハ布片ヲ貼シテ壓抵スルヲ要ス大ナル靜脈ノ出血ナルトキハ妄リニ其部ヲ高舉ス可ラズ空氣ヲ心臟内ニ吸入スルノ恐れアリ
以上ノ處置ヲ施コシ速カニ醫治ヲ乞フ可シ

(二)止血セル創傷ノ處置

創傷ノ出血既ニ止ムモノニ在リテハ清潔ナラシムルヲ以テ最モ緊要ナリトス故ニ清潔ナル布片又ハ綿花ニ石炭酸水ヲ蘸シテ貼用シ適宜ニ繃帶シ而シテ後ヲ醫治ヲ待ツ可シ決シテ不潔ノ布片又ハ膏藥其他無用ノ物品ヲ貼付ス可ラズ

第百九十一章 火傷及ビ湯傷

火傷若シハ湯傷ニ在リテハ其輕重ニ從ヒ多少ノ疼痛ヲ發シ或ハ赤色ヲ

呈シ第一度或ハ水泡ヲ作リ第二度或ハ組織ノ壊死(第三度)ヲ致ス
 處置 ハ單ニ赤色トナリ又ハ水泡ヲ形成セルモノハ新清ナルワセ
 リン オレーフ油又ハ石炭酸油等ヲ塗布シ若シ灼熱疼痛アルカ又ハ組
 織ノ壊死セルモノニ在リテハ石炭酸水ニ浸セル布片ヲ以テ冷捲法ヲ施
 コス可シ | 小ナル水泡ハ破開セシムルヲ禁ズレトモ若シ其大ナルモ
 ノハ細針ヲ以テ穿刺シ其内容液ヲ漏ラシ後ナ上記ノ法ヲ施コスヲ良ト
 ス

第三百九十三章 凍傷

身體ノ一部凍傷ニ罹ルトキハ必ズ温湯若クハ火熱ヲ以テ暖ムルコトナ
 ク先ツ氷片若クハ濕布ヲ以テ摩擦シ後チ毛布ノ類ヲ以テ温カニ之レチ
 包被ス可シ
 全身劇寒ニ觸レテ麻痺セルモノニ在リテハ遽カニ之レチ暖所ニ入ラシ
 ムルコトナク先ツ氷塊若クハ濕布ヲ以テ身體ヲ摩擦シ温暖ナル酒類又
 ハ咖啡等ヲ飲マシメ後チ漸次ニ其身體ヲ温カナラシムルヲ要ス

第三百九十四章 溺死窒息若クハ頓死

溺死窒息又ハ頓死者ニシテ尙ホ假死期ニ存シ心動ノ全ク消失セザルモ
 ノニ在リテハ人工呼吸法ヲ施コシ兼テ身體ヲ摩擦ス可シ人工呼吸法
 ノ簡易ナルモノハ假死者ヲ仰臥セシメ衣服ヲ披キテ胸腹ヲ寛解シ兩手
 掌ヲ患者ノ兩季肋部ニ抵テ呼吸ノ程度ニ應ジ一タビ強ク壓迫シ一タビ
 之レチ緩メ數回反復スルニ在リ其時間ハ凡ソ三十分時ヲ要スルコトア
 リ

第三百九十五章 腔内灌注法

灌注法 ハ煮沸チ經タル水若クハ一乃至五%ノ石炭酸水ヲ用ユ而シ
 テ煮沸水ヲ用ユル場合ニ於テハ其煮沸セル器中ニ於テ冷却セシメ他器
 チ用ユルコトナク直チ之レチイルリガートル中ニ注ギ先ツ
 一タビイルリガートルヲ洗去リ次ニ洗滌ニ要スル所ノ液量チ之レ
 ニ充タス可シ又温度ハ其規定ニ應ジ檢温器ヲ以テ之レチ檢スルヲ要ス
 腔内灌注法ノ種類 ニハ防腐用止血用及ビ分娩催進用ノ三種ア
 種類

防腐用

リ而シテ其各一回ノ液量ハ大凡ソ一〇〇〇トナス
(一)防腐用 ニハ二十倍乃至百倍ノ石炭酸水ヲ用ユ時トシテハ醫師ノ命ニヨリ一千倍乃至五千倍ノ昇汞水ヲ撰用スルコトアリ其温度ハ攝氏三十五度ヲ適當トナス

止血用

(二)止血用 ニハ水冷石炭酸水若クハ攝氏五十度ノ温湯ヲ用ユ時トシテハ酢ニ等分ノ水ヲ加エタル冷液ヲ供用スルコトアリ

分娩催進用

(三)分娩催進用 ニハ攝氏三十五度乃至三十八度ノ温湯一%石炭酸温液ヲ最モ佳トス(一〇〇〇〇若クハ二〇〇〇)ヲ每一時若クハ二時ニ反復シテ用ユ

婦人ノ位置

婦人ノ位置 腔内灌注ノ際ハ婦人ヲ仰臥セシメ其兩脚ヲ屈シ且ツ適度ニ之レヲ開キ臀下ニハ便器若クハ受水盤ヲ挿入ス

灌注ノ法式

灌注ノ法式 先ツ液ヲ充テセルイルリガートルヲ二三尺ノ高ナニ懸ケ始メゴム壓止器ヲ開キテゴム管内ノ空氣ヲ放出セシメ液ノ射出セルニ乗シ他手ニ陰唇ヲ開キイルリガートルノ嘴管ヲ腔

灌注後器械ノ清潔法

内ニ送入シ其嘴管ヲ以テ會陰部及ビ腔ノ兩側壁ヲ交番ニ押壓シ注入液ノ漏泄ヲ容易ナラシムルヲ良トス若シ此際疼痛ヲ訴フルハ灌注液ノ子宮腔内ニ竄入シ之レヲ壓開セントスルニ基ヅクコトアルガ故ニ液ノ注入ヲ停メ嘴管ヲ會陰部ニ壓シ善ク灌注液ヲ流泄セシム可シ

灌注後器械ノ清潔法 使用後嘴管ハ五分間沸湯中ニ煮沸シ管ノ一端ハ稍高カラシムルヲ良トス然ルトキハ熱水善ク管内ヲ流通ス可シ後ヲ暫時間五%石炭酸水ニ浸漬ス可シ若シ護謨管ヲ消毒スルノ必要アラバ一タビ五%石炭酸水ヲ其管内ヲ流通セシメ後チ一二日間其管ヲ同シク石炭酸水中ニ貯フ可シ

第百九十六章 石炭酸水調製法

石炭酸水ヲ調製スルニハ先ツ純石炭酸九分水一分ヲ和シ溶解石炭酸ヲ造リ蓄フルヲ便ナリトス而シテ毎回之レヲ以テ石炭酸水ヲ製ス可シ即チ次ニ掲クルガ如ク此溶解石炭酸ノ一定量ヲ若干ノ水中ニ混シ善ク之レヲ攪和シ全ク水ト溶和シ一點ノ石炭酸球ヲモ存セザルニ至リ之レヲ

イリガートル中ニ移ス可シ若シ水ト溶解石炭酸ト一壺中ニ和シ強
ク之レヲ振盪混和セハ最モ佳ナリ若シ然ラズシテ不完全ノ混和ナラ
トキハ筒状ヲナセル石炭酸球ハ灌注部ニ觸レ之レヲ腐蝕シ甚マシキ害
ヲ生ズルニ至ル可シ次ニ混合ノ液量ヲ記ス可シ

- 一倍百 倍石炭酸水 溶解石炭酸 一〇〇 水一〇〇〇〇
- 二%五十 倍石炭酸水 溶解石炭酸 二〇〇 水一〇〇〇〇
- 三%三十三倍石炭酸水 溶解石炭酸 三〇〇 水一〇〇〇〇
- 四%二十五倍石炭酸水 溶解石炭酸 四〇〇 水一〇〇〇〇
- 五%二十倍石炭酸水 溶解石炭酸 五〇〇 水一〇〇〇〇

第九十七章 灌腸法

灌腸法

催下灌腸

灌腸法 ニ三種アリ(一)催下灌腸(二)藥液灌腸(三)藥養灌腸是レナリ
(一)催下灌腸 通常單ニ灌腸ト稱スルハ催下灌腸ヲ指スモノニシテ
温湯、砂糖液、葛湯、牛乳、ヒマシ油、乳劑、石礫水、食鹽水等ヲ用ユ就中温湯、砂糖
水、石礫水等ハ最モ多ク應用セラル其一回ノ液量ハ二百五十瓦乃至五百

小兒ノ灌腸量

藥液灌腸及ビ
滋養灌腸

瓦トナス五百瓦以上ハ醫師ノ命ニアラサレバ之レヲ用ユ可ラズ温湯ハ
攝氏三十五度ヲ法トナス
位置ハ側臥ニ就カシムルヲ最モ良トス而シテ腔内灌注ニ於ケルガ如ク
悉ク管中ノ空氣ヲ排除シ後ヲ其管ヲ肛門内ニ送ル可シ但シ其嘴管ニハ
豫カンメ油ヲ塗リ寬和ニ廻旋シツ、之レヲ送入スルヲ要ス
灌腸器ハ普通ノゴム灌腸器又ハイルリガートルヲ用ヰ小兒ノ灌
腸若シハ藥品ノ灌腸ニ在リテハ水筒狀又ハ護莫囊製ノ注入器ヲ撰用ス
可シ
小兒ノ灌腸量 乳兒ハ一二食匙(一五〇乃至三〇〇)二歳乃至十歳
ノ小兒ニ在リテハ五〇〇乃至二〇〇〇ヲ適當ナリトス
藥液灌腸及ビ滋養灌腸 藥液灌腸ハ藥品ヲ服用セシム可ラザ
ルモノニ就キ之レヲ肛門内ニ注入スルモノナリ是レ小兒若クハ嚙下シ
能ハザル患者ニ用ユ其量ハ大人ニ於テ五〇〇乃至一〇〇〇ナリ滋養灌
腸ハ飲食物ヲ攝取シ能ハザルノ際牛乳又ハ肉液ヲ注入スルモノナリ

第百八十八章 冷罨法及ヒ氷罨法

冷罨法

氷罨法

冷罨法及ヒ氷罨法ノ効用

(一)冷罨法 ハ之レヲ施コス可キ部分ノ大小ニ應ジ手巾若クハ布片ヲ適宜ニ疊積シ新タニ汲メル冷水若クハ氷ヲ加ヘタル水ヲ浸シテ之レヲ皮膚ノ上ニ置キ油紙若クハ護謨布ヲ以テ更ニ之レヲ被ヒ毎十分乃至十五分時ニ他ノ布片ヲ以テ同様ニ交換ス可シ

(二)氷罨法 ハ凡ソ胡桃大ノ氷片ノ多數ヲ膀胱製若クハ護謨製氷囊中ニ容レ一片ノ布片ヲ皮膚上ニ置キ以テ氷囊ヲ其上ニ貼ス可シ但シ膀胱製氷囊ハ一二日コシテ應用ニ歸スルヲ以テ久時應用スル場合ニ於テハ護謨性品ヲ撰用スルヲ佳トス老人又ハ衰弱セル患者等ニ在リテハ氷罨法ニヨリ其部ノ皮膚全ク壊死スルコトアルガ故ニ此ノ如キ場合ニ於テハ注意シテ豫カシメ數層ノ布片ヲ皮膚上ニ置クヲ要ス將サニ壊死ヲ發セントスルトキハ其皮膚露血ニヨリテ紫色ヲ現ハスモノナリ

冷罨法及ヒ氷罨法ノ効用 冷罨法ハ充血性ノ疼痛出血若クハ炎症ヲ防止スルニ用ユ就中氷罨法ハ其効用著シトス

第百九十九章 温罨法及ヒプリエスニツ氏罨法

エスニツ氏罨法

温罨法

温罨法ノ効用

プリエスニツ氏罨法

芥子泥

(一)温罨法 ハ熱湯ヲ布片ニ浸シ若クハ米飯又ハ米粥ヲ布片ニ包ミテ貼用スル者ナリ或ハ所謂莧藟ヲ湯中ニ煮熱シ用ユルヲ最モ便ナリトス

温罨法ノ効用 陣痛ヲ催進シ痙攣性疼痛ヲ鎮靜シ若クハ化膿ヲ催進セシムルニ用ユ若シ充血性ノ疼痛ニ温罨法ヲ施コストキハ却テ疼痛ヲ増シ病勢ヲ増悪スルモノナリ

(二)プリエスニツ氏罨法 トハ冷水ヲ布巾ニ蘸シテ之レヲ貼シ其上ヲ護謨布若クハフランネルヲ以テ包被シ其部ヲ温蒸スルモノニシテ疾病ノ治癒ヲ催進スルノ効アリ

第百九十九章 芥子泥

芥子泥 ハ芥子末ニ温湯ヲ攪和シ布片ニ延ベ用ユルモノニシテ下痢出血等ニヨリ虚脱セル際之レヲ四肢ニ貼シ若クハ呼吸困難ナルニ當リ胸部ニ貼スルモノナリ而シテ五分乃至三十分時ヲ經患者疼痛ニ耐ユ難

キニ至ラバ之レヲ除去ス可シ

第二百一章 乾角及ビ血角

(一)乾角

トハ内部ノ血液ヲ表面ニ吸引誘導スルガ爲メニ胸部若シ

ハ脊部ニ貼用スルモノナリ之レニ要スル硝子器ヲ吸角ト云フ而シテ之

レヲ貼用スルニハ醫師ヨリ命セラレタル部ニ於テ石炭酸水ノ洗滌ヲ施

コシ吸角内ノ空氣ヲアルコイルラップ上ニ暖マメ以テ之レヲ稀薄

コシ極メテ急速ニ吸角ヲ其局部ニ貼ス可シ此ノ如クスルトキハ吸角内

ノ空氣稀薄トナルヨリ之レヲ充タサンガ爲メニ皮膚ハ吸角内ニ向テ

膨出シ其皮膚内ニ多量ノ血液ヲ吸引スルモノナリ

(二)血角 ハ吸角ヲ貼スルノ部ニ豫カシメ數多ノ小切創ヲ造リ吸角

ニヨリ血液ヲ吸出スルノ法ナリ之レヲ行フニハ先ヅ乾角ヲ貼シテ血液

ヲ吸引シ次ニ其部ニ瀉血刀(又ハ人工蟻針)ヲ抵テ其把子ヲ壓シテ刀尖ヲ

皮膚中ニ刺入セシメ而シテ後ヲ吸角ヲ貼用シ血液ヲ吸引流出セシムル

モノナリ之レヲ施スノ前瀉血刀ハ石炭酸水中ニ浸シ充分ニ消毒センコ

水蛭

トチ要ス此法モ亦固ヨリ醫師ノ命ニヨリテ行フ可キモノトス——血角
ヲ貼セル後ハ温石炭酸水ヲ以テ洗ヒ去リ石炭酸油ヲ蘸セル布片又ハ綿
花ヲ抵テ縛帶ヲ施コス可シ

第二百二章 水蛭

水蛭

ハ局部ノ血液ヲ排除センガ爲メ充血症等ニ用ユ而シテ之レヲ

貼スルニハ其局部ヲ清潔ニシ糖水又ハ乳汁ヲ塗り蟲體ヲ布片又ハ紙片

ニ包ミ其口ヲ皮面ニ接シ以テ之レヲ貼ス可シ或ハ數箇ヲ貼用セント欲

セバ其全數ヲ硝子管又ハ吸角中ニ入レテ之レヲ貼スルヲ可トス又水蛭

ヲ除去セント欲セバ蟲體ニ少許ノ食鹽ヲ撒布ス可シ若シ又誤リテ水蛭

ヲ嚙下セルコトアラバ食鹽水ヲ飲用ス可シ水蛭ハ直チニ死スルモノナ

リ水蛭ヲ貼スルノ數ハ醫師ノ命ニヨリ之ヲ定メ而シテ水蛭落去セルノ

後久シク出血セシムルノ要アラバ温水ヲ以テ屢拂拭ス可シ——出血ヲ

止メント欲セバ綿花ヲ貼シ壓抵スルヲ以テ足レリトス

第二百三章 檢温器用法

檢温器用法

検温器ニハ氷點及ヒ沸騰點ノ兩點アリテ其兩點間ヲ或ハ八十度或ハ百
 度或ハ百八十度ニ區別ス其第一ヲ列氏檢温器八十度第二ヲ攝氏檢温器
 (百度)第三ヲ華氏檢温器(兩點間百八十度氷點下三十二度)ト稱ス但シ華氏檢温器
 ハ氷點下更ニ三十二度ノ度目チ有スルガ故ニ沸騰點ヲ二百十二度トナ
 ス——此種々ノ檢温器ハ各國ノ習慣ニヨリ其使用ヲ異ニス我國ニ於テ
 ハ氣候ノ溫度ヲ計ルニ華氏ヲ供用シ體溫計測用其他學術上ニハ攝氏ヲ
 撰用シ列氏ハ之レヲ使用スルコトナシ

三種檢温器ノ比較

三種檢温器ノ比較 各檢温器ニ就キ體溫適度ノ室溫浴湯ノ溫度
 熱性子宮灌注ノ溫度ヲ比較スレバ次ノ如シ但シ列氏ハ我國ニ於テ用井
 ザルガ故ニ括弧ヲ附シテ之レヲ分ツ

- 室溫 華 17.5° = 華 63.3° = (列 14°)
- 浴溫 華 35° = 華 95° = (列 28°)
- 體溫 華 37° = 華 98.6° = (列 29.6°)
- 熱性子宮灌注溫 華 50° = 華 122° = (列 40°)

三種檢温器ノ
度數ヲ互ニ換
算スル法

三種檢温器ノ度數ヲ互ニ換算スル法 各檢温器ノ氷點及ヒ

沸騰點間ノ度數ヲ對照シテ其割合ヲ求ムルニ攝氏100華氏180列氏80即
 ナ攝氏5華氏9列氏4(五度九度四度)ノ割合トナル故ニ此割合數594ヲ
 記憶シ互ニ其度數ヲ換算シ得ベシ今攝氏ヲ列氏ニ改メノコトハ其攝氏ノ
 度ニ列氏ノ割合數4ヲ乘シ次ニ攝氏ノ5ヲ以テ除ス可シ即チ次ノ如シ

攝 17.5° × 4 ÷ 5 = 列 14°

(17.5 × 4 = 70, 70 ÷ 5 = 14)

之レニヨリテ攝氏十七度五分ハ列氏十四度ナルヲ知ル可シ
 之レニ反シ列氏ニ攝氏ニ換ヘント欲セバ更ニ其列氏ノ度ニ攝氏ノ5ヲ
 乘シ次ニ列氏ノ4ヲ以テ除ス可シ即チ次ノ如シ

列 28° × 5 ÷ 4 = 35°

(28 × 5 = 140, 140 ÷ 4 = 35)

之レニヨリテ列氏二十八度ハ攝氏三十五度ナルヲ知ル
 此故ニ現在セル檢量器(甲)ノ度數ニ是レヨリ算出ス可キ檢温器(乙)ノ割合

數ヲ乘シ此ノ得タル數ヲ甲ノ割合數ヲ以テ除スルトキハ乙ノ檢温器ノ
度數ヲ得ヘシ前ニ記セル二種ノ算式ヲ文字ヲ以テ記スレバ次ノ如シ

$$\frac{\text{攝氏ノ度} \times \text{列氏ノ割合數(4)} + \text{攝氏ノ割合數(5)} = \text{列氏ノ度}$$

$$\text{(節約スレバ)} \text{攝} \times \text{列} + \text{攝} = \text{列, トナル}$$

$$\frac{\text{列氏ノ度} \times \text{攝氏ノ割合數(5)} + \text{列氏ノ割合數(4)} = \text{攝氏ノ度}$$

$$\text{(節約スレバ)} \text{攝} \times \text{列} + \text{攝} = \text{列, トナル}$$

又攝氏ヲ華氏ニ換算スルニハ其理固ヨリ同一ナリト雖モ華氏ハ他ノ檢
温器ト異ニシテ氷點ヲ零度トナサズニテ卅二度ト定メタルガ故ニ算出
シ得タル度數ニ更ニ氷點以下ノ三十二度ヲ加フルヲ要ス故ニ次ノ如シ
$$\frac{\text{攝氏ノ度} \times \text{華氏ノ割合數(9)} + \text{攝氏ノ割合數(5)} = \text{華氏ノ度} + 32^{\circ}$$

$$\text{攝氏} 37^{\circ} \times 9 + 5 = \text{華} 66,6^{\circ} \quad 66,6^{\circ} + 32^{\circ} = \text{華} 98,6^{\circ}$$

即チ攝氏三十七度ハ華氏九十八度ナレト知ル

此ノ如ク華氏ノ檢温器ハ他ノ攝氏及ヒ列氏ニ比スルニ氷點以下三十二
ナル數ノ加ハリ居ルガ故ニ今若シ華氏ノ度數ヲ攝氏若クハ列氏ニ換算

セント欲セバ先ツ始メニ三十二ヲ減シ然ル後チ一般ノ規則ニ從ヒ割合
ノ數ヲ乗除セサル可ラズ即チ次ノ如シ

$$\frac{\text{攝氏ノ度} - 32^{\circ}}{\text{攝氏ノ割合數(5)}} \times \text{華氏ノ割合數(9)} = \text{攝氏ノ度}$$

$$\text{(華} 122^{\circ} - 32^{\circ}) \times 5 + 9 = \text{攝氏} 50^{\circ}$$

即チ華氏一百二十二度ハ攝氏五十度ナルヲ知ル可シ

第二百四章 體温ヲ檢スル法

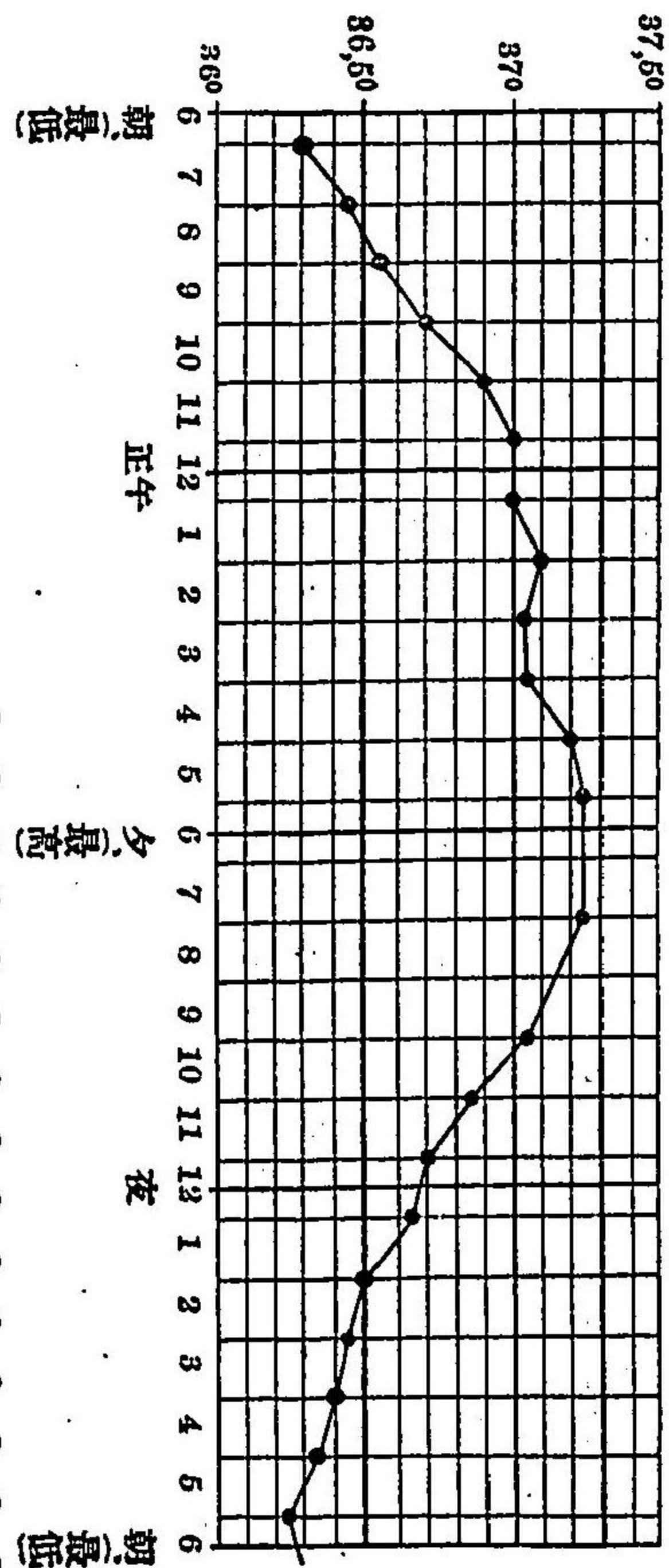
體温ノ檢査

體温ノ檢査ハ腋窩ニ於テ之レヲ施コスルヲ常トス而シテ檢温器ノ
球部ヲ腋窩ノ中央ニ於テ密ニ之レヲ挟ミ十五分時間ヲ經テ其度ヲ檢定
スルヲ要ス其時間短キトキハ水銀ノ昇ル極度ニ達セサルカ故ニ差違
チ生ス可シ時トシテハ直腸又ハ腔内ニ於テ體温ヲ計測スルコトアリ此
等ノ部位ニ在リテハ腋窩ニ比スルニ凡ソ一度高シ即チ健者ノ體温ハ腋
窩ニ於テハ平均三十七度直腸又ハ腔内ニ在テハ三十八度ナリトス
一日中體温ノ變化 一般ニ論スレバ一日中體温ノ最モ低キハ午
前六時(三六三度)ニシテ其レヨリ漸次ニ上昇シ正午十二時ニ至リテ頗ブ

一日中體温ノ變化

ル高シ(三七〇度更ニ午後六時ニ至リテ最高度(三七五度)ニ至リ後ヲ漸シ
低下シ中夜(三六七度)ヨリ翌日午前六時ニ至リテ最低度(三六三度)ニ達シ
後ヲ再ビ前日ノ如ク昇降スルモノトス

圖六十五 第一 體温ノ化驗(體温)中日一



體温ト脉搏トノ對稱 體温增加スルトキハ脉搏モ亦隨テ増加ス
ルモノナリ今體温三十七度ヨリ四十二度ニ上昇スルトキハ脉搏ノ増加
スルコト概ネ次ノ如シ

體温ト脉搏トノ對稱

體温 度	三七、〇	三八、〇	三九、〇	四〇、〇	四一、〇	四二、〇
一分時間脈搏	七九	九一	一〇〇	一〇九	一二〇	一三八

第二百五章 脈搏ノ検査

脈搏ハ體温上昇スルカ又ハ運動ヲ營ムニヨリテ増加スルモノナリ而シ
テ其數ハ年齢ニヨリ又ハ男女ニヨリテ同シカラズ且ツ各男女ニ於テモ
人ニヨリテ甚ダシキ差異アルヲ常トス但シ其平均數ヲ擧クレバ次ノ如
シ

男女ノ脈搏數
年齡ニヨル
搏ノ差異

男女ノ脈搏數 每一分間男子ハ七十二搏女子ハ八十搏ナリトス
年齢ニヨル脈搏ノ差異 初生兒ノ脈搏(一三五)ハ最も多ク年齢
ノ加ハルニ從ヒ漸次ニ減少シ二十年乃至五十年ニ於テハ最も少ナシ(凡
ソ七〇)後ヲ高年ニ至レバ再ビ増加ス可シ即チ每一分ノ脈搏概ネ次ノ如
シ但シ男女ヲ平均セルモノナリ

脈搏ト呼吸トノ對稱

大人ノ呼吸數

尿

135	兒生初
125	歲一
100	歲三
92	歲五
90	歲十
78	歲五十
70	歲十二至十五
74	歲十六
79	歲十八

脈搏ト呼吸トノ對稱 脈搏ノ體温ト共ニ増減スルカ如ク呼吸モ亦體温ノ進ムニ從ヒ其數増加ス可シ故ニ脈搏ト呼吸トハ相伴フテ増減シ一回ノ呼吸ハ概テ四回ノ脈搏ト一致スルモノナリ但シ呼吸ハ脈搏ニ於ケルカ如ク緊要ナラズ

大人ノ呼吸數 ハ一分間凡ソ十八回ナリトス

第二百六章 排泄物ノ論

人體排泄物ノ主要ナルモノハ炭酸肺ヨリ出ツ水蒸氣肺及ヒ皮膚ヨリ排泄セラル尿及ヒ糞便トナス茲ニハ尿及ヒ糞便ニ就キ説述ス可シ

尿 ハ男女ニヨリテ其量ヲ異ニスレトモ大人一晝夜ノ尿量ハ平均一

糞便

二〇〇〇トナス外氣ノ温度ニヨリテ著シク其量ヲ異ニス是レ身體温暖ヲ感スルトキハ尿中ニ排泄セラル可キ水分ハ水蒸氣若クハ汗トナリテ皮膚及ヒ肺中ヨリ發散スルニ基ク

健充體ノ尿ハ恰モ蒸溜水ノ如ク毫モ微菌ヲ含マズ故ニ新クニ微菌ヲ混入セシムルコトナケレバ決シテ腐敗ヲ生セズ此ノ如ク尿ハ微菌ヲ有セザルヲ以テ創傷ニ觸レシムルモ通常化膿ヲ生スルノ恐レナシ又傳染病者ノ尿ト雖トモ其微菌ノ尿中ニ現出スルハ稀ナリトス

糞便 ハ大人一日ノ排泄量平均一七〇〇トナス但シ肉食スレバ其量少ナク多量ノ粗食ヲ取ルトキハ甚ク増量ス可シ

糞便ハ健體ニ於ケルモノト雖トモ夥クシク各種ノ微菌ヲ混シ創傷ニ觸レシムルトキハ恐ル可キ化膿若クハ傳染症ヲ發ス可シ殊ニ傳染病者ノ糞便ハ最モ危險ニシテ之レニヨリテ感染スルモノ甚ク多シトス

產婆學講本 終

產婆學講本附錄

第二百七章 內回轉術

產婆ニシテ內回轉術ヲ行フ可キハ次ギノ場合ヲ以テ限リトナス可シ

(第一) 横位ニシテ子宮口ノ既ニ全ク開ケルニ際シ其産婦陣痛強劇ニシテ醫師ノ來着ヲ待ツトキハ産婦ノ生命ヲ危險ナラシムルモノ

(第二) 子宮口開大スルノ後六時間以内ニ醫治ヲ乞フコト能ハザルモノ

(第三) 雙胎第二兒ノ横位ニシテ胎胞既ニ破裂シ肩胛深ク下降スルノ際速ニ醫治ヲ加フルコト能ハザルモノ

(第四) 前置胎盤ニシテ子宮口既ニ開ケルノ際危險ノ出血ヲ現ハシ栓塞法ヲ施コスト雖トモ到底止血セス患婦ハ急性貧血ニヨリ大ニ危篤ニ迫レルノ時ニ當リ醫師ノ來ルコト大ニ遲延ス可キカ若クハ不明ナルモノ

(第五) 産婦卒然トシテ死亡セルニ當リ心臟麻痺若クハ肺水腫等ニヨリ胎兒尙ホ生存シ子宮口既ニ開大セルモノ

內回轉術ニ二種アリ

横位ニ於ケル內回轉術
施術ノ準備

是レナリ、次ニ內回轉術ノ術式ヲ説述ス可シ

第二百八章 內回轉術ノ術式

內回轉術ニ二種アリ 甲、横位ニ於ケルモノ、乙、頭蓋位ニ於ケルモノ是レナリ即チ次ノ如シ

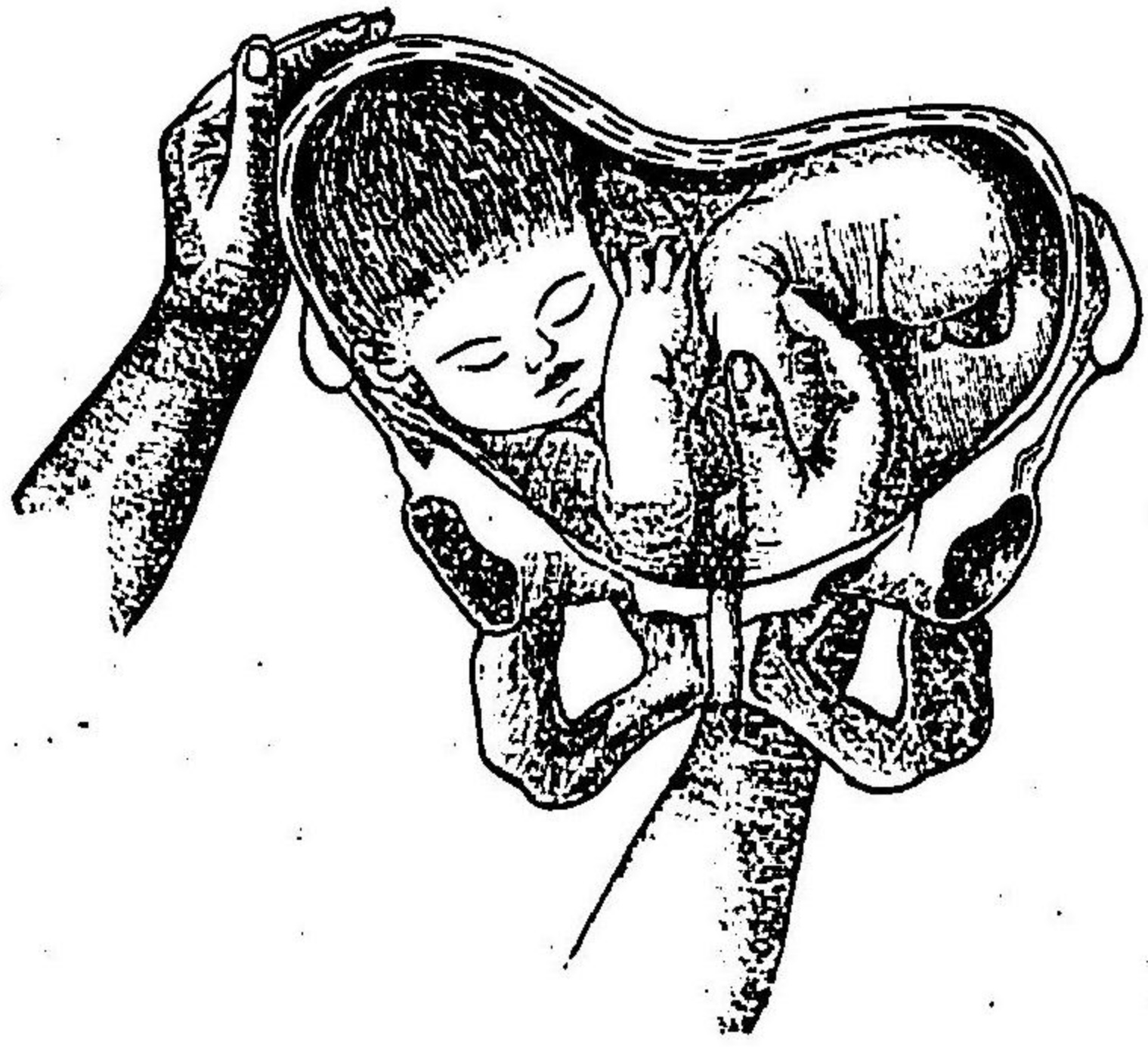
(甲) 横位ニ於ケル內回轉術

施術ノ準備 先ツ直腸膀胱ヲ空虚ナラシメ法ニ從テ手及ヒ外陰部ヲ消毒シ産内ニハ二%石炭酸水ヲ以テ灌注ヲ施コシ指ヲ送入シテ之レヲ洗ヒ産婦ハ兩足ヲ屈シテ仰臥セシメ臀下ニハ枕子ヲ挿入シ之レヲ高クシ若シ寢臺ヲ用ユルトキハ横床位若クハ半横床位(第三篇百九十四頁)ヲ與フ可シ手ハ常ニ胎兒ノ臀部ニ對向スルノ一手ヲ撰用ス可キモノニシテ第一横位ナルトキハ左手、第二横位ナルトキハ右手ヲ用ユ可シ又回轉ヲ終レルノ後ハ第一横位ハ之レヲ第二足位トナシ第二横位ハ之レヲ第一足位トナサシムルヲ要ス而シテ兒足ハ可及的兩足ヲ把握スルヲ佳トス若シ又一足ナルトキハ足位トナセル後ニ先進ス可キ一足ヲ擇フ

施術ノ方式

圖七十百第

圖ノ術轉回内ルケ於ニ位横



徐々ニ腔内ニ送入ス可シ但シ陣痛起ラハ其進行ヲ停メ陣痛ノ止ムヲ待
 チ之レヲ進マシムルヲ要ス又兒ノ手若シ露出セハ臍帶結紮紐ヲ結ビ付
 ケ子宮内ニ退却セシメザルヲ要ス——手既ニ子宮内ニ達セハ現存セル
 卵膜ハ之レヲ破開シ直チニ子宮内口ニ入り豫カシメ察知セル足ノ部位

可シ故ニ第一横位ニ在リテ
 ハ右足第二横位ニ於テハ左
 足ヲ把握ス可キモノトス

施術ノ方式

衣袖ヲ舉

上シ法ニ從フテ肘部ニ至ル
 マデ手ヲ消毒シ(第二篇九十

四頁)之レニ石炭酸油ヲ塗リ

(外陰部モ亦消毒セルノ後其

指ヲ收束シテ圓錐形トナシ

他ノ手指ヲ以テ陰唇ヲ開キ

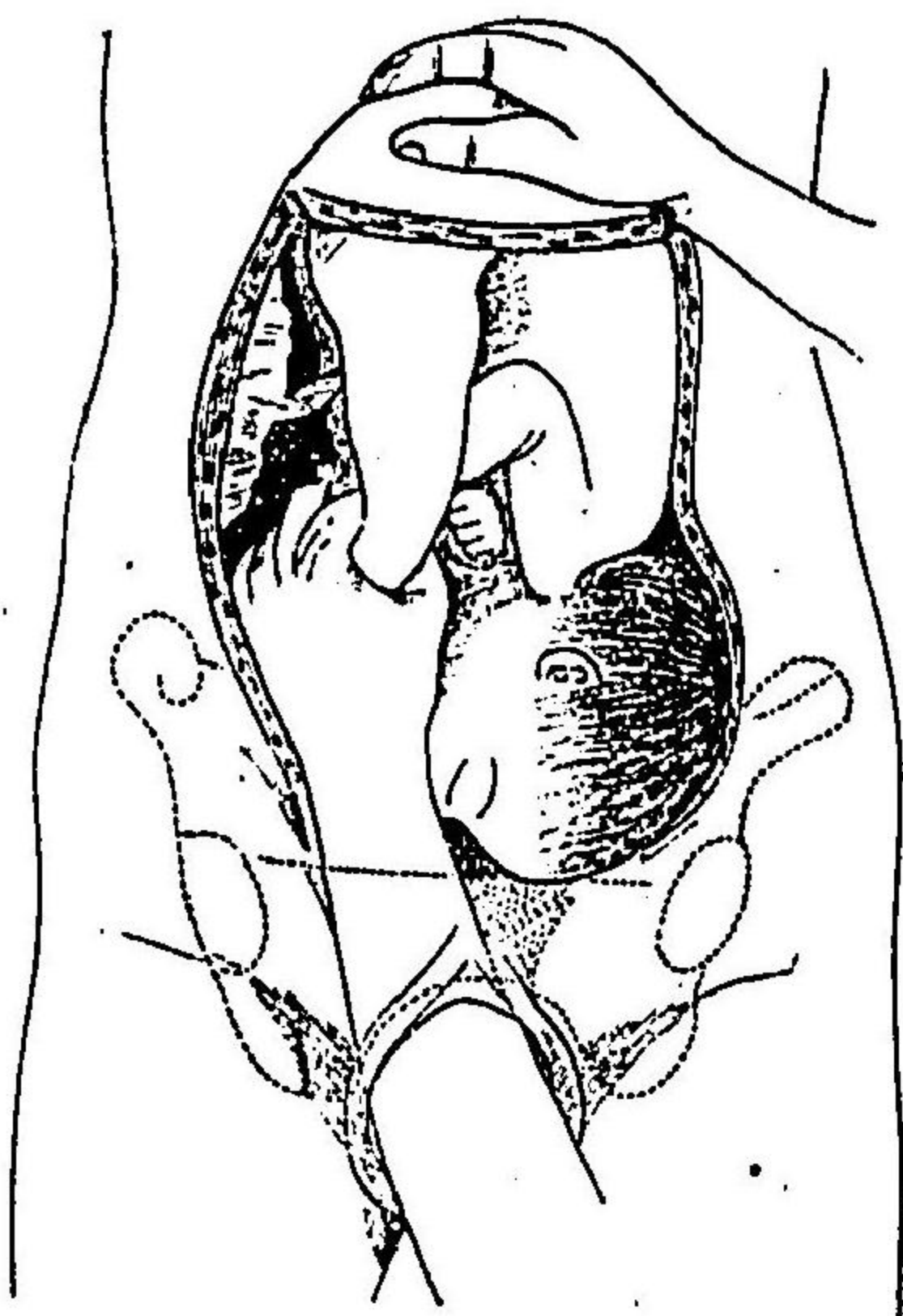
ニ向フテ進ミ他ノ一手ハ外方ヨリ同シク其足部ニ抵テ之レヲ内手ニ向
 ツテ押壓シ以テ足ヲ把握シ易カラシム若シ胎水既ニ漏泄シ子宮腔内ニ
 餘地ナク手ヲ送入スルコト難キトキハ先ヅ兒ノ背面ニ沿ヒ臀部ニ至リ
 次ニ大腿ニ隨ヒ以テ足部ニ達ス可シ而シテ兩足ヲ把持スルニハ兩足蹠
 ノ中間ニ中指ヲ挾ミ示指及ヒ環指ヲ各足ノ外側ニ貼シ一足ナルトキハ
 足蹠部ヲ示中兩指間ニ執持スルヲ要ス此際足ト手トヲ誤ルコトナク且
 ツ足ノ左右モ亦善ク辨識セザル可ラズ(第六編三百九頁)——此ノ如クニ
 シテ一足若クハ兩足ヲ把持セバ陣痛間時ニ於テ牽引シ骨盤後壁ニ就キ
 之レヲ挽出シ兒ノ膝部ヲ陰裂間ニ至ルマテ牽出ス可シ此ノ如ク兒足ヲ
 牽下シ終レバ則チ回轉術ヲ全フセルモノナリ

或ハ單ニ一足ノミ把持スルコトヲ得テ之レヲ牽下スルニ足部ハ陰裂ニ
 達スルモ臀部ノ回轉セザルコトアリ此ノ如キモノハ臍帶結紮紐ヲ以テ
 之レニ結着シテ執持シ更ニ手ヲ子宮内ニ挿入シ他ノ一足ヲ挽出スルヲ
 要ス

頭位ニ於ケル
内回轉術
準備其他手術
法ノ大體

(乙)頭位ニ於ケル内回轉術

準備其他手術法ノ大體
ハ横位ニ於ケルモノト異ナルコトナ
シ但シ手ハ兒ノ腹面ニ對向ス可キモノヲ用ユ故ニ第一頭蓋位ニ在リテ



圖八十百第
圖ノ術轉回内ルケ於ニ位蓋頭

送ルヲ務ム可シ横位ニ比スレバ回轉スルコト容易ナリ
回轉後ノ處置 前置胎盤ニ於ケル出血ノ爲メ回轉術ヲ行ヘルトキ
ハ兒足ヲ牽下スレバ止血ス可キガ故ニ爾後之レヲ自然ニ委ネ挽出法ヲ

回轉後ノ處置

行フ可ラズ然レトモ若シ胎兒ノ心音緩徐トナリ假死ニ陥ラントスルノ
徴ヲ見バ猶豫ナク挽出ヲ施コサバ爾可ラズ其挽出法ニ就キテハ第三編
第八章第百九十七頁ニ説述セリ
産婦ノ死セルガ爲メニ回轉術ヲ施コセルモノニ在リテハ速カニ挽出法
ヲ行フ可キコト勿論ナリトス

第二百九章 産婆携帶用器具

産婆携帶用器
具ノ主眼

産婆携帶用器具ノ主眼 トスル所ハ防腐用、洗滌用及ビ綳帶用
諸品ヲ備フルニアリ液腸用、止血用諸品、救急用藥品、其他臨時必用ノ物品
ヲ備フルニ在リ而シテ其諸品ハ携帶、使用共ニ簡單ニシテ且ツ容易ニ調
製シ得ラレサル可ラズ我國ニ於テハ從來未ダ此目的ニ適合セル携帶用
産婆器具ナルモノナク實地ニ當リテ大ニ不便ヲ感セリ故ニ著者ハ次ノ
器具物品ヲ製作撰定シ之レヲ産婆日常ノ用ニ供シ大ニ利便ヲ獲タリ今
其品目ヲ記載ス可シ

産婆携帶用器具ノ品目

産婆携帶用器
具ノ品目

- 一、 イルリガートル 護謨管凡ソ一迷的兒半、及ヒ護謨壓止器ヲ具フ
- 二、 腔内用嘴管
- 三、 灌腸用嘴管
- 四、 金屬カテーテル
- 五、 英製彈力カテーテル
- 六、 ネラトソ氏カテーテル
- 七、 聽胸器及ヒ時計
- 八、 檢温器
- 九、 浴用檢温器
- 十、 爪鍬子
- 十一、 刷毛
- 十二、 ビンセット
- 十三、 海綿

- 十四、 石礮
- 十五、 溶解石炭酸 六〇、〇
- 十六、 三十倍石炭酸油 三〇、〇
- 十七、 オレーフ油 三〇、〇
- 十八、 ホフマン液 二〇、〇
- 十九、 礮砂精 二〇、〇
- 二十、 桂皮丁幾 二〇、〇
- 廿一、 灌腸用石礮末 一五、〇
- 廿二、 礮酸末 一〇、〇
- 廿三、 三〇、〇液量計
- 廿四、 瓦設、一迷的兒
- 廿五、 脫脂綿 二枚
- 廿六、 晒布、一迷的兒半(腹帶等ニ用ユ)
- 廿七、 丁字綳帶

廿八 臍帶剪刀
 廿九 臍帶結紫絲
 三十 臍帶
 卅一 硼酸末撒布器
 卅二 小兒用灌腸器
 卅三 便器
 卅四 洗滌用受水盤
 卅五 洗滌消毒用鹽一組(五個)
 卅六 攜帶用燭器(手燭)
 卅七 前垂布
 卅八 藍布圍用外被

是レナリ右ノ中、ビンセット、灌腸用石礫末、硼酸末撒布器、便器、受水盤、洗滌消毒用鹽、攜帶用燭器及ヒ、藍布圍用外被ノ八種ハ絶テ他ノ產婆攜帶用器具中ニ之レアルヲ見サル所ナリ然レトモ攜帶スルコト不利ナラズ且ツ應

用ノ至便ナルヲ以テ余ハ之レヲ產婆用器具中ニ加ヘタルモノナリ殊ニ
 ビンセットノ如キハ從來ノ製ヲ改メ其末端ヲ全ク鈍圓ナラシメ毫モ使
 用上ノ危険アルヲナカラシム之レヲ實驗ニ徵スルニ產婆ノ清潔消毒上
 ニ於テ極メテ便益アルヲ知レリ便器ニ就キテハ既ニ第三編第六十章(百
 四十九頁)ニ説述セリ洗滌消毒用鹽ニ至リテハ產婦ノ家ニ就キ鹽其他ノ
 物品ヲ以テ假用シ得サルニアラスト雖トモ通常ハ其家頗ル富裕ナルニ
 アラサレバ之レヲ給スルコト難ク且ツ不潔ニシテ消毒ヲ妨クルノ恐れ
 アリ故ニ醫師若クハ產婆ハ數個ノ鹽ヲ攜帶スルコト實際上甚ダ緊要ナ
 リトス燭器ノ如キモ亦普通民家ニ在リテハ之レヲ有セサルヲ甚ダ多ク
 而シテ之レヲ所有ストナスモ許多ノ不潔物ヲ添附シ存スルカ故ニ其妨
 害甚ダシク且ツ反射鏡ヲ有セサルガ故ニ前方ヲ照輝スルヲ能ハス加之
 産科ノ業務ハ多ク夜間ニ存シ假使ヒ晝間ナリトスルモ檢視ス可キ局部
 ハ光明ニ背シテ數々ナルヲ以テ燭器ヲ攜帶シテ其便ニ供スルハ實際上
 頗ル肯綮ヲ得タルモノト信ス

產婆攜帶用器具ノ説明
鐵葉製洗滌用受水盤

產婆攜帶用器具ノ説明

1、鐵葉製洗滌用受水盤 ヨシテ縱徑二七、五仙迷幅徑二六、五仙迷深サ六、五仙迷ヲ有シ一線ハ波狀ニ一線ハ弓狀ニ彎曲シ他ノ二線ハ直形ヲナス屈曲線ハ適宜ニ彎部ノ彎曲ニ適合セシム

亞鉛製便器

2、亞鉛製便器 ニシテ長サ二三、五仙迷幅一六、五仙迷高サ十二仙迷離解シ得ベキ蝶番ニヨリ联接セラレタル蓋ヲ具ヘ其蓋ヲ反回固定シ便器ノ尖頭トナシ以テ臀下ニ挿入シ得可ラシム適度ノ内容一千五百瓦清潔上ノ用意周到ナリ

洗滌消毒用鹽

3、洗滌消毒用鹽 ハ漸次ニ相重容ス可キ五個ノ鐵葉製鹽ニシテ最内(最小)ノ一鹽30ハ好適ニイルリガートルヲ容致ス可シ其大サ縱徑二十四仙迷半幅徑十三仙迷半深サ九仙迷内壁ニ五百瓦ヨリ二千瓦五百瓦ニ至ルマテノ標線ヲ附シ以テ内容液ノ量ヲ示シ石炭酸水ヲ調製スルノ便ニ供ス此鹽ヨリ漸次ニ其大サヲ加ヘ最外即チ最大ナルモノ(温湯ノ字ヲ符記ス)ハ縱徑二十五仙迷半幅徑十五仙迷半深サ九仙迷ナリ上圖ノ

亞鉛製イルリガートル

如ク各鹽ニ30,50,100ト記セルハ三十倍五十倍及ヒ百倍ノ石炭酸水ヲ蓄フルノ符ニシテ冷水及ヒ温湯ハ即チ冷水ト温湯トヲ容ル可キモノナリ

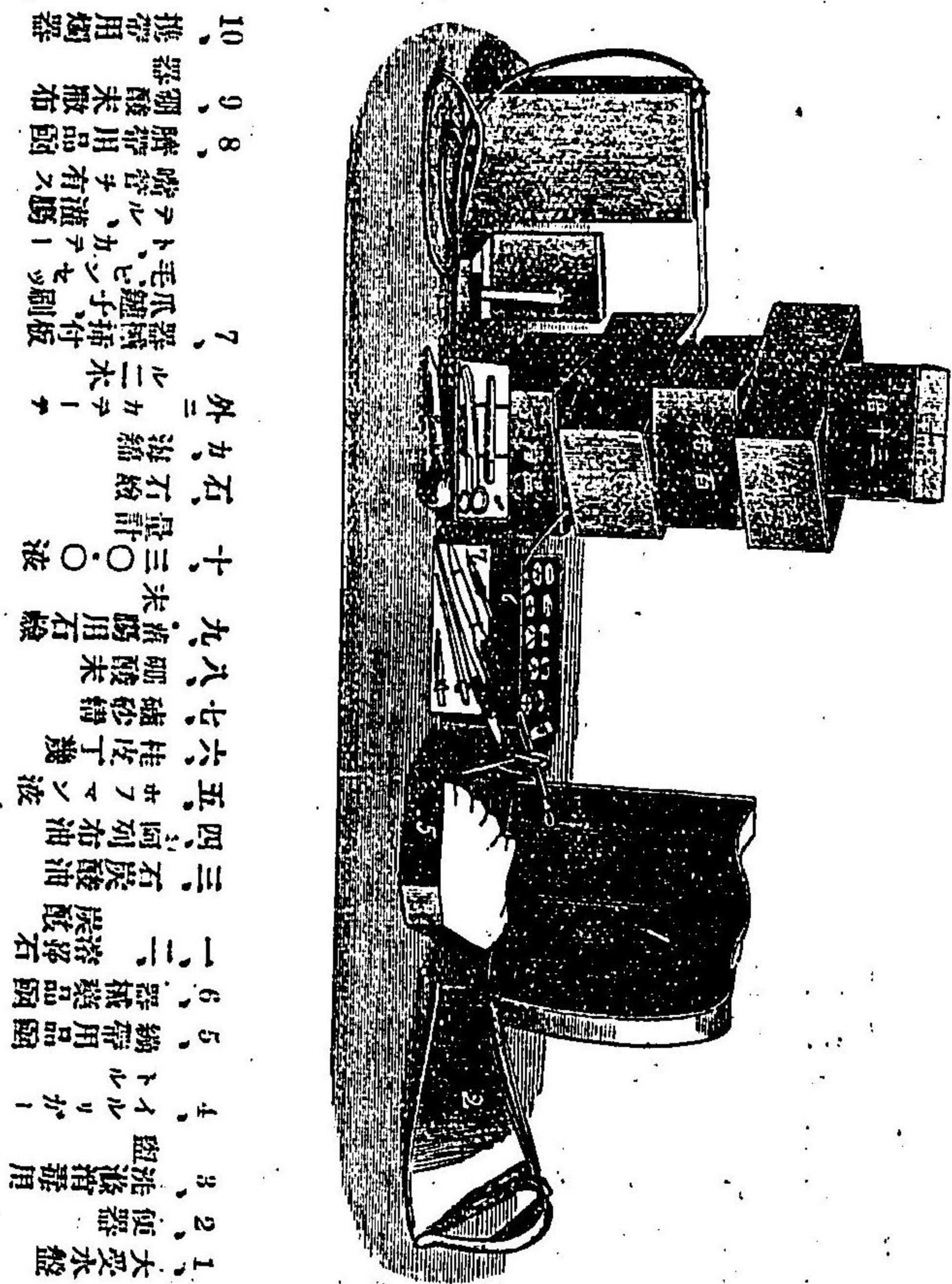
鐵葉製ノ縋帶品

4、亞鉛製イルリガートル 外高二十三仙迷深サ二十仙迷半(底高ク附着セリ)幅徑九仙迷縱徑十三仙迷ヲ有シ二千瓦ノ液ヲ容ル可ク亞鉛製ニシテ6ノ漿品器械函ヲ好適ニ挿容セシムイルリガートルノ内面ニハ容液ノ五百瓦千瓦乃至二千瓦ニ至ルマテ各々漆ヲ用テ標線ヲ表記セリ又イルリガートルノ底下高サ二仙迷半ノ腔内ニハ液ノ流出管ヲ具ヘ且ツ常時ハ玆ニ護膜管ヲ絡廻收容シ之レヲ護膜壓止器ト共ニ小木箸(石炭酸水ヲ調製スルニヨリテ簡易確實ニ支持セシム)

蓋ヲ有スル亞鉛製藥品器械函

5、鐵葉製ノ縋帶品函 ニシテ縱徑二十三仙迷幅徑十三仙迷深サ三仙半迷使用ノ便ニヨリ其四隅ヲ欠ク(圖中ニハ二隅ヲ欠ケル他ノ器ヲ入ル)瓦設晒布丁字縋帶及ヒ脫脂綿ヲ容ル又同形ノ蓋アリテ栓塞法等ヲ施コスノ際脫脂綿ヲ防腐液ニ蘸シ之レヲ容ル、ノ用ニ供ス

圖 九 十 百 第



產婆携帶用器具ヲ開展シテ示セル圖

- 1 大変水盤
- 2 便器
- 3 洗滌用器具
- 4 トイレ
- 5 携帶用品函
- 6 産婆用品函
- 7 外カ石
- 8 石炭酸油
- 9 量計
- 10 携帶用品函

十三仙迷深サ九仙迷内ニ掃除ノ際抜去シ得可キ區劃ヲ有シ溶解石炭酸
 二壞石炭酸油一壞オレフ油一壞ホフマン一壞礫砂精一壞桂皮丁幾一
 壞礫酸末一壞灌腸用石礫末一壞液量計石礫海綿及7器械挿附板8臍帶
 用品函並ニ9礫酸末撒布器腔内洗滌用管管英製彈力カテーテルネラ
 トン氏カテーテル小兒用灌腸器浴用檢温器ノ六品ヲ挿附セル一板(圖中
 クチ)ヲ藏ス可シ此函ニハ同形ニシテ深サ六仙迷半ヲ有スル蓋(適度ノ内
 容千二百瓦)ヲ具ヒカテーテル挿入ノ際尿ヲ受容スル等ノ用ヲナサシ
 ム其一邊ヲ圓形ナラシムルハ此用ニ便ナラシメンガ爲メナリ

7、爪鑑子、刷毛、長ピンセット、金屬カテーテル及ヒ灌腸用
 嘴管ヲ挿附セル亞鉛板ニシテ、器械函中ニ在ル適應ノ溝中ニ
 挿嵌セラルハモノナリ

8、亞鉛製ノ臍帶用品函ニシテ臍帶剪刀、管狀礫酸末撒布器、臍帶
 結紮絲、臍帶斷端被包用瓦設片、脫脂綿、小片及ヒ臍帶ヲ容ル縱徑十五
 仙迷、幅徑七仙迷半、深サ三仙迷、同形ノ蓋ヲ有シ之レニ防腐液ヲ盛り剪刀

爪鑑子、刷毛、
 長ピンセット、
 金屬カテーテル
 及ヒ灌腸用
 嘴管ヲ挿附セ
 ル亞鉛板
 亞鉛製ノ臍帶
 用品函

硼酸末撒布器

及ヒ結紮絲ノ消毒ヲナサシム此ノ如ク此函中別ニ硼酸末撒布器及ヒ脱脂綿ヲ容ル、ハ贅物ノ感ナキニアラスト雖トモ實際上ニハ該函ノミチヲ携帶シテ小兒ノ家ニ起クノ便アルニヨリ特ニ此ノ如ク定メタルモノナリ

鐵葉製攜帶用燭器

9、硼酸末撒布品 ニシテ外陰部ノ小損傷等ニ硼酸末ヲ撒布スルニ用ユ產婆若シ此器ヲ所持セザルトキハ腔入口前庭等ニ防腐藥ヲ撒布スルコト不十分ナルノミナラズ漫リニ藥品ヲ散失セシムルノ弊アリ

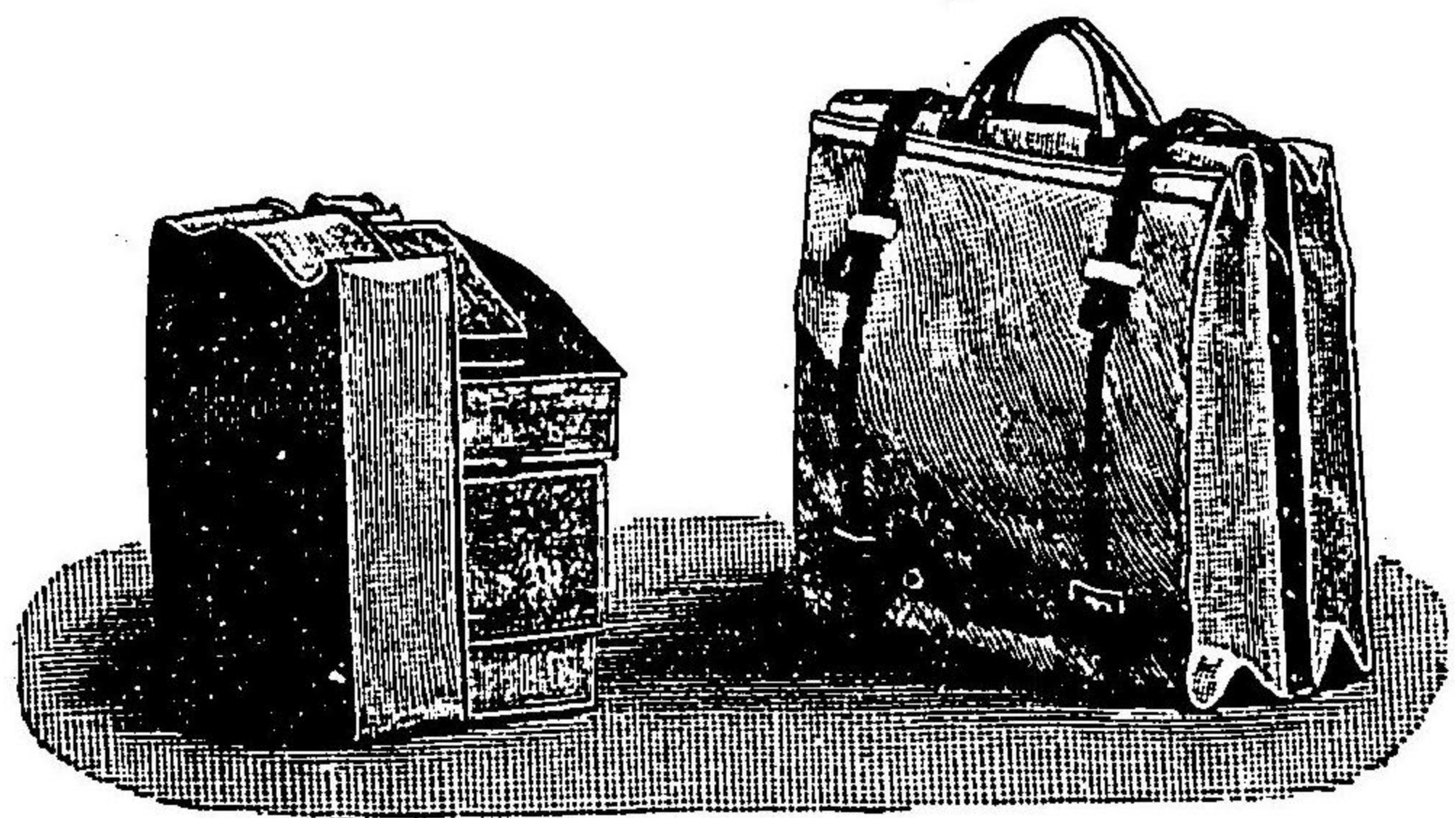
10、鐵葉製攜帶用燭器

(手燭)ニシテ縱徑十三仙迷幅徑八仙迷深サ

二仙迷蝶番ヲ以テ聯接セル二筐ヨリナリ其關節ヲ開クトキハ兩筐九十度ノ角度ヲナシ一ハ基底ヲナシ一ハ反射鏡ヲナス反射鏡ヲ有セサル燭器ハ產科ノ處置ニ就キ甚タ不便ナルモノナリ又此器ノ要部ハ悉ク離解セシメ得ベキガ故ニ消毒清潔上一モ不完全ヲ感スルコトナシ其他、筐中ニハ常ニ寸燭及ヒ蠟燭ヲ蓄フルガ故ニ一モ他人ヲ勞セズ數秒時ヲ出テ燭光ヲ點シ得ベシ此燭器ハ平常之レヲ懷中ニスルモ亦甚タ便ナリ特

ニ旅行ノ際チ然リトナス

第百二十圖 全產婆用器ヲ提籃中ニ收メタル圖



第百廿一圖 產婆用器具ヲ結束シ現ハセル圖

此ノ如ク種々ノ器具ヲ鐵葉製若クハ亞鉛製トナセルハ偏ニ隨所ニ容易ク製作シ得ベク且ツ其價(全器具代價八圓乃至十圓)チ廉ナラシメシメシガ爲ナリ若シ銅製若クハニッケル製トナサハ極メテ佳ナリ

以上ノ諸器ヲ結束スレバ第百二十一圖ニ示スガ如ク縱徑二十七仙迷半幅徑十六仙迷半高サ二十六仙迷半ノ一簇トナスヲ得ベク而シテ其一簇ノ左邊ヲセルモノハ大受水盤ニシテ他ノ諸器ヲシ

テ半ハ其内ニ容レシム即チ其最上ナルハ燭器ニシテ次ハ便器最下湯ノ一字ヲ倒マニ現ハセルハ洗滌消毒用鹽ナリ此鹽内ニハ自餘ノ三十餘品ヲ藏スルモノナリ此ノ如ク一簇ノ諸器ヲ第百二十圖ニ示セルガ如キツツ製ノ提籃中ニ收ム又提籃中ニハ別ニ聽胸器檢温器前垂布藪布團ノ外被ヲ藏ス可シ此藪布團ノ外被ハ當時我國ノ民間ニ於テハ實際之レヲ要スルコト頗ル多シ何トナレハ我國現時産科上ノ事項ハ甚タ不完全ヲ極ムルヲ以テ産婆ノ突然トシテ産家ニ聘セラル、ニ當リ産婦ハ汚穢ナル藪屑ノ中ニ坐シ而シテ産期既ニ迫レルヲ多シトス此ニ於テ成規ノ産床ヲ造ラン極メテ難シ此ノ際産婆若シ清潔ナル藪布團ノ外被ヲ有スルトキハ咄嗟ノ間ニ之レヲ調製シ以テ産床ヲ造リ防腐法ノ不完全ヲ濟フコトヲ得可シ——産婆ハ平常此提籃中ニ各種ノ物品ヲ整備シ之レヲ携エテ産家ニ赴ク可シ

又産婦ノ回訪ノ際ノ如キハ敢テ此全提籃ヲ携帶スルコトヲ要セス器械藥品函ヲ收メタルイルリガイトル及ヒ前垂布ヲ携フルヲ以テ足レ

リトス其イルリガイトル内器具ノ重量ハ二千四百瓦(六百匁)一手ヲ以テ輕ク之レヲ携帶ス可シ其他聽胸器檢温器并ニ時計ハ寧ロ懷中ニ蓄フルヲ便ナリトス

全産婆用器具ヲ收メタル提籃ハ次ノ大サト重量トチ有スルガ故ニ産婆ハ通常自ラ之レヲ携帶シ歩行スルヲ難シ是ヲ以テ殊ニ人夫ニ託スルカ又ハ車上ニ携帶セザル可ラズ但シ此一事ハ分娩處置ノ完全ヲ期シ人命ヲ保全スルガ爲メノ當然ノ義務タルコトヲ觀念セザル可ラズ乃チ其器具ノ容積ト重量トチ示スコト左ノ如シ

- 一 提籃中ノ全産 高徑三十五仙迷(一尺一寸七分)
- 一 提籃中ノ全産 縱徑三十三仙迷(一尺一寸)
- 一 提籃中ノ全産 幅徑十六五仙迷(五寸五分)
- 一 提籃中ノ全産 重量六千五百瓦(一貫六百二十五匁)

第一百十章 產婆ノ社會及ビ法律規則ニ關スル事項

産婆ノ義務

産婆ノ義務 一、産婆ハ流産又ハ死産ヲ處置セルトキハ之レカ屈出ヲナスノ義務アリ今東京府ニ行ハル規定ヲ舉グレバ次ノ如シ其他各地方ニ至リテモ概テ之レニ準ス可キモノトス

死亡届並ニ埋葬證規則(摘要)第二條 醫師及ヒ産婆ハ妊婦四ヶ月ニシテ流産又ハ死胎分娩セシモノハ即時ニ雛形ノ届書ニ妊娠ノ月流産或ハ死胎分娩ノ原因月日等ヲ記入シ調印ノ上其家人ニ與フベシ但シ出産ノ後一旦呼吸シテ死セシ者ハ出産届ヲ爲シ更ニ死亡届ノ手續ヲ爲ス可シ

第四條 流産四箇月以上或ハ死胎分娩ノ者ハ醫師若クハ産婆ノ届書ヲ請求シテ區ハ區役所郡ハ戸長役場ニ差出シ埋葬免許證ヲ受ケテ之レヲ墓地監者寺院ニテ監者ヲ兼ヘ差出スベシ

●流産又ハ死胎分娩届

郡區町村名番地

何府縣華士族平民職業

何某妻妾(或ハ私生)

姓名

年齢

一何月妊娠

一流産或ハ死體分娩ノ原因知ルベキ丈ケ

一何月何日流産或ハ死體分娩

右ハ頭書ノ通流産或ハ死體分娩致候ニ付此段及御届候也

郡區町村名番地

年月日

醫師或ハ産婆

姓

名

郡區長 何某殿

一、以上ノ他、産婆ハ日常ノ業務ニ就キ政令ノ示ス所ニヨリ遵奉スル所ナカル可ラス今試ミニ新潟縣ニ行ハル、産婆取締規則ノ概要ヲ舉グレバ次ノ如シ

●産婆取締規則(摘要)

第一條 產婆ハ内務省若シハ本縣ノ免狀ヲ所持スルモノニ限ル

第九條 產婆ハ產婆組合會ノ規定ニヨリ其集會ニ出席シ業務上必要ナル學術ノ講習ヲ受ク可シ

第十條 產婆ハ常ニ其業務ニ必要ナル器具物品ヲ整備シ置クベシ
前項ノ器具物品ハ臨時衛生官吏ニ於テ檢査スルコトアル可シ

第十一條 產婆ハ妊婦產婦產褥婦及ビ初生兒ノ檢診ニ際シ疾病若シハ危險ノ虞アルヲ發見シタルトキハ速カニ醫師ノ診察ヲ求メシム可シ

第十二條 產婆ハ母體若シハ小兒ニ藥物ヲ與ヘ疾病ヲ治療スルヲ得ス但シ產婆學ノ範圍内ニ於テ一定ノ藥物ヲ與ヘ一時ノ危險ヲ防キ又ハ平易ノ處置ヲ行フコトヲ得

第十三條 產婆ハ產科手術ヲ行フコトヲ得ズ
但シ產婆學ノ範圍内ニ於テ一定ノ急救手術ヲ施コスコトヲ得ト雖トモ醫師ニ屬スル產科器械ヲ應用ス可ラス

第十四條 產婆ハ一年二回(六月末及ビ十二月末)左式ニ據リ其取扱ビタル分娩ノ成績表ヲ製シ所轄警察官署又ハ駐在巡查ニ差出ス可シ

分娩成績表

自一(七月)至六(十二月)

產婦ノ姓名 及ハ 年	何 回 分娩 ノ 種	產婦ノ發熱 及ハ 疾病	產兒		產兒ノ健否 及ビ 死産
			男	女	

第十五條 免狀ヲ得スシテ產婆ノ業ヲナシタルモノ及ビ第二條第十二條第十三條ニ違背シ又ハ正當ノ理由ナクシテ第十一條ニ違背シ母體又ハ小兒ヲ危險ニ陥ラシメタルモノハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
上ニ記スル所ノ第十四條ノ如キハ該規則中ノ緊要ナル一項ニシテ各産

産處置ノ良否ヲ察シ兼テ日本産科學進歩ノ材料ヲ供出スルモノナリ
唯余輩ノ憾トスル所ハ此條項ニ附帶セル罰則ノ制裁ナキコト是レナリ
而シテ余輩ノ更ニ望ム所ハ日本國ノ法律トシテ此種ノ最モ完全ナル法
令ヲ定メ普ク之レヲ施行スルニ在リ

三、獨乙國ノ如キニ在リテハ特ニ産熱ニノミ關シテ教育醫務大臣ハ
産婆ニ訓諭スル所アリ今參考ノ爲メ之レヲ抄録スレバ次ノ如シ

●産婆熱ニ關スル獨乙國教育醫務大臣ノ産婆ノ訓諭

- 一、産婆ハ居常清潔ヲ主トシ殊ニ産室若クハ褥室ニ於テハ最モ清潔法ヲ行フ可シ
- 二、産婆其職ニ從事スルノ際ハ一定ノ被服ヲ着シ可シ即チ衣袖ハ上膊ノ中央ニ掲舉シ白色ニシテ洗濯ニ堪ユルモノヲ擇ビ又胸部ノ前面ニハ廣キ前垂ヲ以テ之レヲ覆フ可シ
- （前垂ハ産婦若クハ産婦ヲ初メテ検査セントスルノ際、新ニ洗濯シテ他ノ衣類ト區別シ蓋ヒタルモノヲ用ユルヲ要ス）

三、産婆ハ産婦若クハ産婦ニ接スルニ先チ爪ヲ剪リ且ツ磨キ爪
襪爪下ノ汚垢及ビ逆爪ノ如キモノヲ去リ刷毛石鹼ヲ用キテ手指及
ビ前膊ヲ洗淨ニス可シ

四、産婆ハ殊ニ次ノ諸品ヲ携帯スルヲ要ス

（甲）新クニ洗濯ヲ經タル前垂、其幅ハ衣服ノ前半面ヲ全ク被覆スルヲ要ス

（乙）石鹼

（丙）殊ニ定メタル爪鑑子刷毛

（丁）新クニ洗濯セル手巾

（戊）溶解性石炭酸（一瓶）此瓶ニハ剝離セサル様、表箋ヲ貼シ注意ス可キ
石炭酸適當ニ稀釋シ外用ノミニ供用ト明記シ密栓ヲ施シ且ツ十五
瓦及ビ三十瓦ヲ量リ得ベキノ液量計ヲ添フ可シ又檢温器ハ必ズ携
帶ス可シ イルリカートル ハ一里埵兒ノ容量ヲ有シ半量埵兒ノ
部ニ劃線ヲ記シ護管ハ一乃至一、五迷ニシテ硝子製嘴管ヲ具フ可シ

但シ亞鉛製イルリカートルヲ用ユルモ亦佳ナリ

五、產婆ハ必ス其所用ノ器具ヲ清潔ニ保テ石炭酸ノ如キモ能ク之レヲ蓄ヘ他ノ小兒等ノ之レニ近ツクモ害ナカラシム可シ

六、妊婦產婦及ビ痔婦ノ内檢査ハ手及ビ前膊ヲ暴露シ清潔ニスルコトナケレバ之レヲ施コス可ラズ

内檢査ヲ施コスガ若クハ生殖器ノ創傷ヲ處置セント欲スルノ際ハ袖ヲ上膊ノ中部以上ニ掲擧シ此ヨリ以下ニ下ラシム可ラズ此ノ如クニシテ爪鉤子刷毛石鹼ヲ用ヒ微温湯可成の一回煮沸セシメタルモノ)中ニ善ク洗ヒ清淨ナル手巾ニテ拭去シ次ニ同一ノ方ニヨリ被檢者ノ外陰部及ビ其近傍ヲ洗滌シ脱脂綿又ハガーゼヲ以テ之レヲ拭フ可シ

若シ產婦ナルトキハ以上ノ外可成の清潔ニシテ豫カシメ温メタル襪襪及ビ上敷敷布等ヲ用テ產床及ビ産褥ヲ作ル可シ

上項ノ準備終ラハ石炭酸中ニ於テ殿ニ手ノ消毒法ヲ行ヒ然ル後始

メテ妊婦產婦若シハ痔婦ノ檢査ヲ施コサンコトヲ要ス

七、總テ產婆ノ用ユ可キ石炭酸ハ常ニ次ノ方ニヨリテ調製ス可シ石炭酸ハ第四項ニ記セルモノヲ取リ其三十瓦ナ一里埕兒ニ混シ善ク攪和シ石炭酸ヲシテ水底ニ沈澱セシムルコトナカラシム可シ最良ナルハ栓塞セル瓶中ニ入レ強ク震盪シ且ツ數回轉倒セシムルニ在リ又鉢中ニ混和セント欲セハ久シク之レヲ攪拌ス可シ之レニ反シ石炭酸ヲイルリガートル中ノ水ニ注加スルハ不良ナリ即チ此ノ如クスルトキハ溶解スルコトナクシテ直チニ流出シ且ツ體部ニ觸レテ腐蝕作用ヲ惹起スルモノナリ

八、產婦ニハ第一回ノ檢査ヲ施コスニ先タチ二里埕兒ノ石炭酸溶液ヲ作ル可シ此石炭酸液ヲイルリガートルニ盛ルニ先タチ嘴管臍帶剪刀カテーテルヲイルリガートル内ニ入レ護謨管ヲ接合シ而シテ後チ溶液ヲ滿タス可シイルリカートルヲ用テ灌注セント欲セハ内ニ貯ヘタル諸器ト凡ソ半里埕兒ノ石炭酸トハ他

ノ容器ニ移サントトキ要ス又器械ハ一回使用セルノ後チ石鹼コテ洗ヒ乾カシテ常ニ石炭酸液中ニ入レ以テ處置ノ終ルニ至ル可シ石炭酸溶液ノ殘リ一里迄兒半ハ之レチ二ツニ等分シ一ハ第一回ノ檢査ニ當リ手ノ消毒ニ用キ他ハ次回ノ檢査ノ前後ニ之レヲ供用ス可シ

九、既ニ分娩ヲ終レルモノニ在リテハ產婆ハ臥床ヲ調ヘタルノ後一回煮沸セル微温湯ヲ以テ外陰部ヲ洗滌シ脱脂綿若クハカーゼヲ以テ之レヲ拭去ス可シ

十、產婆ノ腔内灌注ヲ施スハ通例醫師ノ指定ニ從フ可シト雖トモ產婆教科書ノ殊ニ規定セル場合ニ於テハ石炭酸水ヲ用キテ自ラ之レヲ行フ可キモノトス

十一、產婆ハ必要アルニ在ラサレハ產婦ノ陰部ニ觸レ又ハ惡露ニ汚染セラレ若クハ化膿セルガ如キ體部ニ觸接スルコトナク且ツ之レニ類似セルモノ假ヘバ潰瘍若クハ死産兒汚染セル襟襪ノ如キモ

之レヲ避ケンコトヲ要ス其他傳染性諸病即チ產熱膿毒症敗血症子宮及ビ腹膜ノ炎症質布的里梅毒淋疾腸室扶斯虎列刺等ノ患者ニハ可及的の近接セサランコトヲ務ム可シ

十二、產婆若シ產婦ノ陰部又ハ惡露ニ汚染セル物品ニ其手ヲ觸レシムルトキ第六及ビ第八項ニ説述セルガ如ク第一回ノ檢査ニ準シ綿密ニ洗滌ス可シ

十三、產婆若シ化膿又ハ惡臭アル惡露ニ觸レ或ハ第十一項ニ記セル諸傳染性病患者ノ手若クハ器具ニ接觸セルトキハ第十二項ニ從テ洗滌シ且ツ少ナクモ五分間石炭酸水中ニ消毒シ同時ニ使用セル器械ハ先ツ洗滌シ次ニ煮沸シ後チ之レチ石炭酸水中ニ浸漬ス可シ

十四、產婆若シ產熱敗血症膿毒症子宮内膜炎丹毒實扶的里猩紅熱痘瘡麻疹等ノ傳染病患者若クハ此諸症ノ疑ヒアル病者ノ家ニ至ルコトアラバ其衣服ヲ交換シ且ツ第十二項ニヨリテ嚴ニ消毒法ヲ施コシ然ル後チニアラザレバ妊婦產婦及ビ產婦ヲ檢査ス可ラス

十五、產婆ノ家宅ニ前項ノ諸症若クハ其疑アル疾病ヲ生スルカ若クハ產婆ノ處置セル痔婦ニシテ產痔熱子宮炎腹膜炎又ハ其疑アル諸症ヲ發スルトキハ該產婆ハ行政廳ノ豫防規則ニ服シ其業務ヲ停止スベキモノトス

十六、產痔熱子宮炎腹膜炎若クハ此諸症ノ疑アル患者ヲ處置セハ其間ハ全ク妊婦ノ檢査ヲ禁シ產婦及痔婦ハ緊急ノ場合ニ於テノミ之レヲ檢スルヲ得ベシ但シ此際先ッ全身浴ヲ取り石礮ヲ以テ善ク洗淨シ新衣ヲ服シ而シテ後第十四項ニヨリテ消毒法ヲ施コスベシ

十七、產婆第十四項ニ記セル諸病若クハ其疑アル患者ニ接セルノ際ニ着セル所ノ衣服ハ之レヲ他ノ者ト混スルコトナク直チニ之レヲ洗淨煮沸スルカ若クハ熱氣消毒法ヲ施コスニアラサレハ他所ニ携帶ス可ラス

十八、產婆ハ死體及ビ死體ノ衣服ニ接觸スルコト勿レ若シ之レニ觸ル、コトアラハ第十六項ニ從テ所置センコトヲ要ス

產婆ノ權利 一、產婆ハ疾病又ハ異常ノ存セサル限りハ其學識ト技術トニヨリ各種ノ分娩ヲ處置シ母兒兩者ノ生命身體ヲ保全スルノ權利アリ加之

一、法庭ニ出テ證人トシテ事實ノ陳述ヲ命セラル、ニ當リ場合ニヨリ其命令ヲ拒絕スルコトヲ得ベシ即チ日本刑事訴訟法第三編第三章第六節證人訊問ニ就キテ之レヲ見ルニ次ノ如シ

●第六節 證人訊問

第二百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏公吏タリシ者其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師藥商稔婆辯護人公證人神職僧侶其身分職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且ツ之レヲ説明ス

可シ

又民事訴訟法第二編第一章第六節人證ニ於ケルモノハ即チ左ノ如シ

●第六節 人證

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一、官吏、公吏又ハ官吏公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二、醫師、藥商、穩婆、辯護士、證人、神職及ヒ僧侶ガ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三、問ニ付キテ答辯ガ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ追訴ヲ招ク恐レアルトキ

第四、問ニ付テノ答辯ガ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生ゼシム可キトキ

第五、證人ガ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非ザレバ答辯

産婆ノ罪惡

スルコト能ハザルトキ

産婆ノ罪惡 既ニ述ブルカ如ク産婆ハ其地位高尚ニシテ業務上種々ノ權利ヲ有スルモノナレトモ若シ其處置スル所正シキヲ失スルトキハ罪惡ニ陥リ害ヲ社會ニ流シ己モ亦法律上ノ處分ニ服セサル可ラザルニ至ル今日本刑法第三編第一章第八節第十二節及ヒ第四編違警罪ノ條項ヲ見ルニ左ノ如シ

●第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女、藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ニ亦前條ニ同ク因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以上ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師、穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

●第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百六十條 醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官
僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知リ得タル陰私
ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮
ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但シ裁判所ノ呼出ヲ
受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

●第四編 違警罪

第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘

留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

九、醫師穩婆事故ナシテ急病人ノ招キニ應セサル者

以上產婆ノ社會及ビ法律規則ニ關スルモノヲ舉ケレバ此ノ如シ今ヤ余
輩ハ筆ヲ此章ニ擱スルニ臨ミ切ニ希望スル所ハ各產婆ガ外ハ其本然ノ
技藝ヲ練磨シ内ハ普通ノ學識ヲ脩メ以テ其品性ヲ高フシ產婆本來ノ地
位ヲ明ラカナラシメ進テ我國產婆特有ノ氣風ヲ發揚スルニ在リ是レ吾

人カ一日モ忘ルハ能ハサル所ナリ

產婆學講本 大尾

明治三十一年一月八日印刷
同 年一月十三日發行



著述者

高橋辰五郎

發行者

小立鉦四郎

印刷者

松澤 缸三

印刷所

同 勞 舍

發兌書肆

南 江 堂

正價金壹圓六拾錢

(電話本局千三百三十番)

(電話本局三百六十九番)

東京市本郷區湯島切通坂町八番地

東京市麹町區下六番町十七番地

新潟縣新潟市四州前通拾番町十五番地

東京市本郷區湯島切通坂町八番地

東京市麹町區下六番町十七番地

關西大賣捌所

松村九兵衛

大阪市心齋橋筋一丁目

賣 捌 書 肆

- | | |
|---------------|-------|
| 東京市日本橋區馬喰町二丁目 | 島村利助 |
| 全 市本郷區春木町三丁目 | 島村支店 |
| 全 市日本橋區通三丁目 | 丸善支店 |
| 全 市本郷區龍岡町 | 吐鳳堂 |
| 全 市全 區春木町二丁目 | 半田屋書店 |
| 全 市全 區春木町三丁目 | 南江堂支店 |
| 名古屋市京町一丁目 | 野崎覺次郎 |
| 岡山市石關町 | 渡邊千代治 |
| 京都市二條通柳馬場 | 若林茂一郎 |
| 金澤市石浦町 | 宇都宮書店 |
| 熊本市新二丁目 | 長鳴次郎 |
| 長崎市引地町 | 安中集榮堂 |

● 豫 告 ●

高橋辰五郎先生編述
產婆學講本備忘錄

定價凡ソニ拾錢
紙數凡ソ百頁

我國醫學界ニ於テ文字ト用語トノ亂雜チ極ムルハ識者ノ慨シテ措カザル所ナリ蓋シ文字用語ノ學術ニ於ケルハ猶ホ治術上ノ藥品ト器械トニ於ケルガ如シ器械巧ナラズ藥品精カラザルハ庸醫ノ事ナリ書中ノ文字用語共ニ亂雜ナリトセバ何ゾ獨リ學問ノ善美ヲ望ム可ンヤ譬ヘハ文字ノ音讀ニ於テ機骨ヲ讀テ「ゲウコツ」トナス然レモ機骨ハ古來「ゲウ」ノ音ナシシテ「ゼウ」若クハ「ダウ」ナリ又顯顯ノ顯ノ如キモ「セツ」ニアラズシテ「シヨフ」ナリ顯門ノ如キモ「ソウモン」ト旨讀スルモノ多シト云フ人若シ矛盾チ「ホコト」ト讀メハ世皆ナ其陋チ笑フ醫書モ亦何ゾ獨リ其笑チ免ル可ンヤ高橋先生茲ニ見ル所アリ產婆學講本備忘錄ヲ編纂セラレ一々文字ノ誤チ正シ音讀ノ不正チ矯メラル洵ニ當代ノ義學ナリ特ニ言語文字ノ難易ヲ問ハズ大抵解釋ヲ施コセルガ故ニ教育不全ナル女生徒ト雖モ亦產婆學講本ヲ解讀スルニ難カラズ世ノ講本ヲ手ニスルモノハ必ズ此備忘錄ヲ參看セラレシテハ弊舖ノ望テ止マザル所ナリ

●廣告●

ドクトル緒方正清先生纂著
高橋辰五郎先生纂著

產科學

完備 全部六冊 精圖百五十六個

- 第一卷 正價金五拾五錢
- 第二卷 正價金四拾錢
- 第三卷 正價金三拾五錢
- 第四卷 正價金九拾五錢
- 第五卷 正價金八拾錢
- 第六卷 正價金七拾五錢

郵稅各冊金四錢

該書ハ兩先生ガ、ルンゲ、マルチン兩氏ノ產科書ヲ本トシ兩先生ノ親シク實驗セル所ヲ以テ之レヲ補ヒ加之日東泰西二十餘種ノ產科書ニ就キテ參酌編述セルモノニシテ事實ノ豐富ナル推論ノ明確ナル文章ノ暢達ナル理解ノ容易ナル蓋シ我國著譯書中第一位ニ居ル殊ニ第四卷手術編ノ如キハ我國ニハ曾テ見ザルノ珍編ニシテ之ヲ繕カバ恰モ良師ニ就キ親シク百般ノ產科手術ヲ實習スルノ思ヒアラノ是レ弊舖ガ進デ之レヲ大方ニ紹介スル所以ナリ

ドクトル醫學士柴田耕一
平出謙吉譯

充爾 婦人科準繩

改正增補第二版 全一冊

正價金九拾錢
郵稅金八錢

全部判別紙數十四行三十字詰二百餘頁、精圖百三十六個、着色美麗石版圖一葉
附錄女病雜抄(一欄二十三字詰二十一行)百十六欄

ドクトル緒方正清先生 共譯
高橋辰五郎先生

婦人科診斷學

上下二卷

鮮明ナル精圖二十七個入
正價金一圓三拾錢
郵税 金 十二錢

本書ハ兩先生ガ獨乙國産科婦人科ノ大家ヨット、フアイト氏ノ原著ニ就キ得意ノ健筆ヲ以テ譯述セラレタルモノナリ婦人科診斷學ノ書之レヲ我國ニ求ムルニ唯此一書アルノミ此學ニ志アルモノハ宜シク一本ヲ坐右ニ備フ可シ

婦人科手術學

全部六冊

- 第一卷 插圖四十七個 正價金四十五錢
- 第二卷 插圖五十一個 正價金四十錢
- 第三卷 插圖四十個 正價金五十錢
- 第四卷 插圖四十八個 正價金八十五錢
- 第五卷 插圖三十六個 正價金六十錢
- 第六卷 插圖三十一個 正價金一圓

郵税各冊金四錢

衛生局長後藤新平先生序
ドクトル緒方正清先生譯

産科圖解

全部貳冊 上卷 再版精巧著色 正價金七十五錢
下卷 精圖百五個 正價金五十錢

我國婦人科産科界ヲ論ズレバ東ニ帝國大學アリ西ニ大坂緒方病院アリ緒方病院ノ産科婦人科ニ長タルモノハ實ニ緒方正清先生ナリ先生ノ學問ト技術トニ至リテハ吾人竝ニ稱揚スルノ愚ナルヲ知ル此二書ハ先生ガ數星霜ノ熱心ヲ以テ譯述述作セラレタル珍書ニシテ實ニ我國婦人科産科學界ノ光明ト云フ可シ

發賣所

東京本郷區湯島切通坂町八番地
南江堂

助産ノ葉

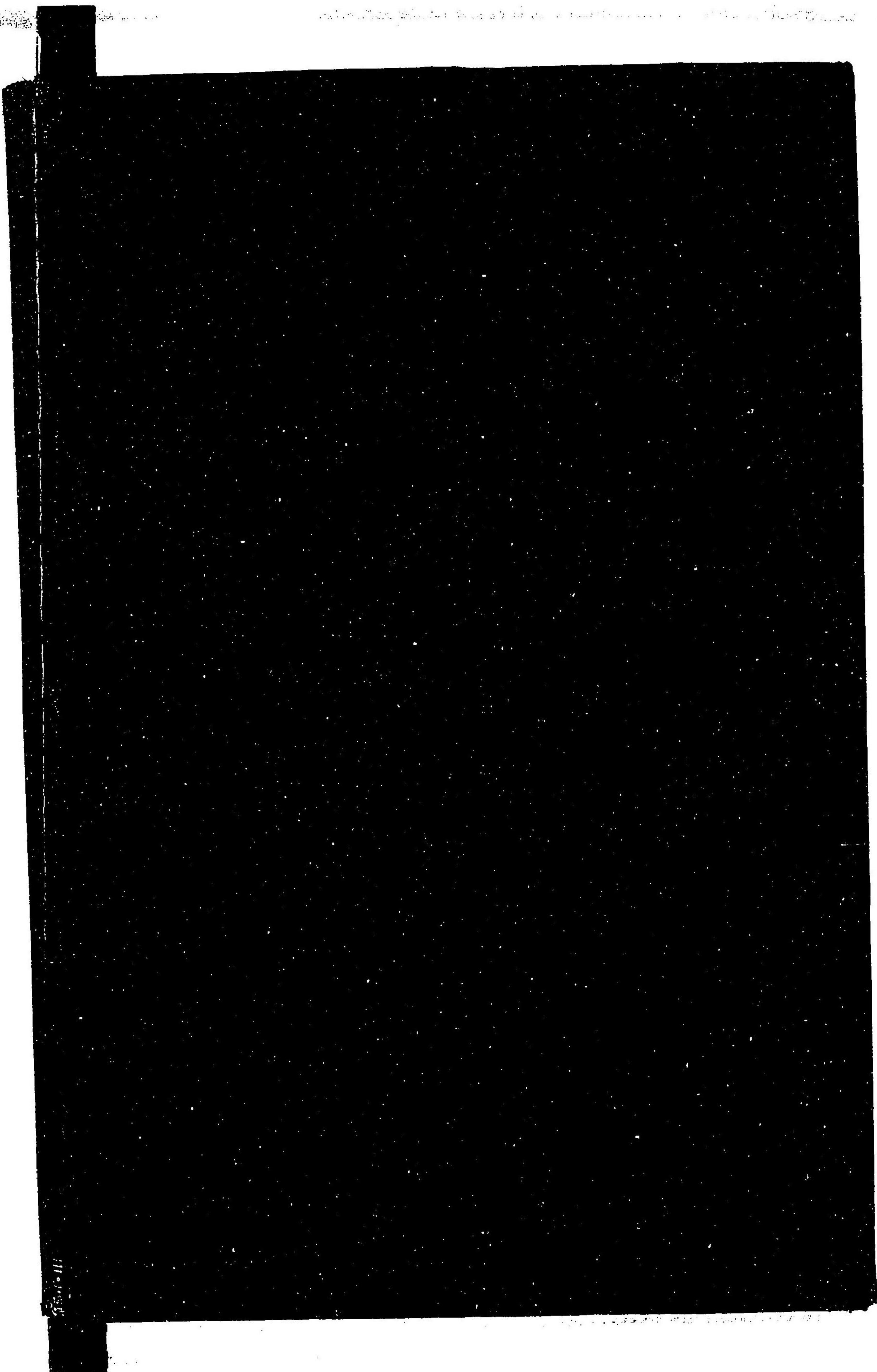
毎月一回發行 第十一號 十一日發兌

本誌ハ本邦唯一ノ助産科雜誌ニシテ日本及ビ歐洲ニ於ケル最近助産術ノ現況ハ勿論諸大家ノ名説各國助産婦社會ノ出來事ハ細大報導シテ洩スナシ實ニ産婆及ビ産科醫諸君ノ好誼友タリ入會セント欲スルモノハ左記學會ヘ申込マルベシ會費ハ一ヶ年前金八十錢ヲ要ス

大坂市東區今橋三丁目緒方邸内

助産婦學會

56
別庫
6





059874-000-9

56-6

産婆学講本

高橋 辰五郎/著

M3 1

CBI-0124

